

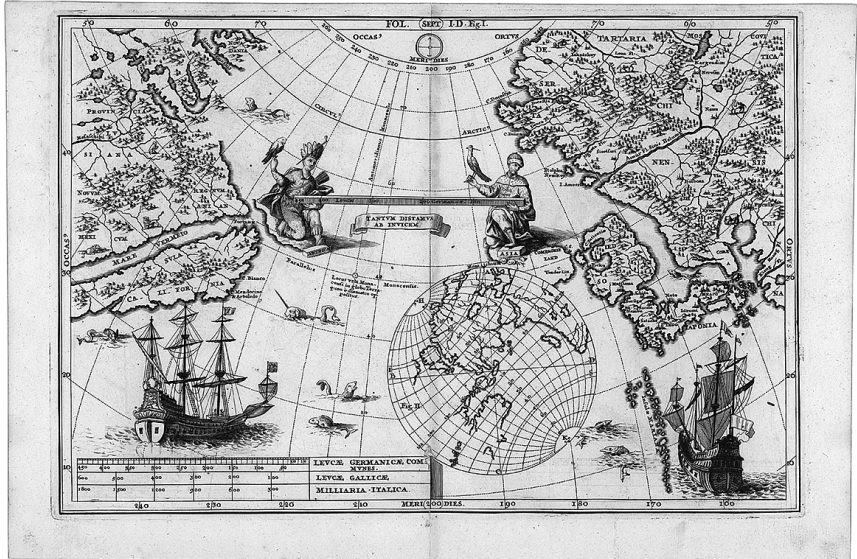
日文研

2018年3月

no.60

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター



ハインリッヒ・シェーラー『アメリカ・アジア間の距離』（ミュンヘン、1710年刊）

この地図は、ハインリッヒ・シェーラー（1628～1704）によって1700年前後に作成されたものであるが、一見したところ、何を表しているのかが分かりにくい。しかし、よく見ると、右下に描かれている大きな島にIAPONIAの文字が書かれているのが分かる。イエズス会士であったシェーラーは、ディリンゲン大学での教授職を経た後の1680年頃から、バヴァリア公の教師を務めていた。教育活動の傍らでシェーラーはそれぞれテーマごとの題目が付けられている7冊から成る地図帳を作成した。それらの地図帳は1702年～1710年の間にミュンヘンで出版された。この地図は『政治的地理』と題する地図帳に所収されている。シェーラーの地図にはポルトガル人やオランダ人が16～17世紀にヨーロッパにもたらしたアジアの地理的情報が正確に採用されている。ただ、地図製作者がなぜこの地図の大陸や島の位置を左右反転させたのかは謎に留まる。

日文研所蔵西洋古版日本関係地図（解説：フレデリック・クレインス准教授）

日文研

—— エッセイ ——

小特集 「元号を考える」

坪井秀人 僕が元号を使わない理由

葛 継勇 紀年と文字

磯田道史 弘化度年号勘文のあとさき

瀧井一博 元号法再読

マルクス・リュッターマン 年月を表象する意図および元号の意味をめぐって

イーゴリ・ポトーエフ 慣用句における文化的要素の受容の問題

ゴ・フォン・ラン ベトナムのホア・ルー祭—日本の祇園祭との比較—

—— センター通信 ——

石上阿希 イギリス人宣教師の手紙

北浦寛之 映画『ハッピーアワー』によるハッピーな時間

— 日文研創立三〇周年記念イベント報告

共同研究

基礎領域研究

彙報

所員活動一覧

2

4

10

16

21

25

31

36

45

48

52

63

65

74

エッセイ

小特集 「元号を考える」

二〇一七年二月八日、今上天皇（おそろく来年からは平成天皇）の退位日を二〇一九年四月三〇日とすることが閣議決定され、一三日に政令として公布された。翌五月一日に皇太子が即位するとともに、平成に代わる新元号の使用が始まる見込みで、新元号は事前に二〇一八年中に発表される予定とのことである。明治改元時に一世一元制を取り入れ、『皇室典範』で天皇崩御時の皇嗣即位の規定が設けられて以来、改元の機会は制度的に、天皇の崩御時に限定されてきた。だがこのたび今上の希望を受け、生前退位が特例的措置として認められたことで、崩御・即位によらない改元が行なわれることになった。これまで一世紀半、改元は天皇崩御とともに突如訪れるものだったのであり、今回の改元スケジュール事前告知は、明治以来の日本人にとって初めての体験である。

元号の特色は、国家が一定頻度でこれを改め、年のカウントを1に戻す点にあり、無限のカウントアップを前提とする西暦やヒジュラ暦とは原理を異にする。今の日本は国家規模での年数リセットを体験できる、世界的にも稀有な国である。元号制度はかつて漢字文化圏で広く行なわれ、日本では七世紀から（継続的制度としては八世紀から）採用されたが、一九四五年に保大（大越国）と康徳（満洲国）が廃されてからは、日本にのみ遺存するものとなっている。かくも根強く用いられ続けてきた元号は、日本の社会や文化を考える上で、一つの素材になる

ものだろう。そこでこのたびは明治以来初となる「予告された改元」を迎えるに当たり、本誌で元号をテーマとした小特集を組むことにした。来年のリセットを前に、元号を考える手がかかりになれば幸いである。

榎本 渉（国際日本文化研究センター准教授）

小特集 「元号を考える」

僕が元号を使わない理由

坪井 秀人

元号について書くようにとのお申し越しを受けて書いているのだが、実はまったく気が進まない。何しろ自分は元号を使わない人間だからだ。元号を使う人たちや組織、あるいは使うべきだと主張する人たちに対して、特に何も言うべきことはない。使うのも使わないのも自由。それだけだ。僕は他人が個人としてどのような時間的呼称を使おうとも干渉はしないし（使うなどとは言えないという意味において）、逆に自分も他人からとやかく干渉されたくない。

〈一世一元〉の天皇代替りと結びついた元号を使わなければ西暦使用ということになるが、世間には元号を使わず西暦を用いると、西暦はキリスト紀元ではないかという批判もある。しかし、ロンドンの時間を標準に世界の時間を決定するグリニッジ平均時（GMT）がそうであるように、所詮、時代も時間も恣意的にしか統一することが出来ない。タイなど東南アジア諸地域の仏暦や台湾の民国紀元のような例もあるが、併記はともかく、西暦をまったく使わない地域は世界では稀で、その批判は西欧由来だから洋服を着るなどという水掛け論を誘発するのがオチであろう。したがってここでも西暦批判の議論には乗らない。

もっとも、二十一世紀のこの現代に〈皇紀〉（神武天皇即位紀元。今年二〇一八年は〈皇紀

二六七八年」に当たる)を信奉して使う人と戦時期の歴史について語らなければならなくなったとしたら、それはさすがに居心地が悪い。日本が起こした「先の大戦」をどう呼ぶかということに似て、時代区分や紀年法をどう使い、何を選ぶかは、自ずと政治的な態度表明とならざるを得ない。「皇紀」については、スカルノらが日本の敗戦の二日後にジャカルタで行ったインドネシアの独立宣言の日付が「〇五年八月一七日」と日本軍政時代を引き継いで皇紀(二六〇五年)を用いていることは、よく知られている。紀元や元号とは、ひとり日本国内にとどまらないアジアや世界の歴史にも関わるのだ。

元号使用については他人からとやかく言われたくないと書いたが、すべてを撥ね付けられるわけでもないだろう。僕の場合最初の就職先は公立大学で次は国立大学、そして現在は日文研と、文字通りずっと国公立の宮仕えの身。私立の学校や民間企業のことにはわからないが、お役所での公式文書や日常的に回答を求められる書類などはほぼすべて元号使用がデフォルトになっている。個人番号の時もそうだったが、原理的なところで抵抗はしても局所的には抵抗しないという態度を僕なりに選んできたので、「平成」と記された(まるで踏絵を促されるように)余白に年を書き込んだことも何度かはある(数えるほどではあるが)。だが、許される限りは「平成」には上に線を引いて消して西暦を書き込むことをなるべく続けてきた。これはもう平成が始まって以来、ずっとだ。

元号については一九七九年に成立公布された元号法という法律があるが、それは元号を使えとは言っていない。もちろん日本国憲法のどこにも元号については記されていない。国民や官公庁に対して元号を使用せよと強制する法的根拠はどこにも存在しない。官公庁の使用も慣行に属するし、政府(具体的には参議院での質問に対する一九八七年当時の首相中曽根康弘の答

弁)の見解も、元号使用は〈国民への協力〉を呼びかける域内にとどまる。

元号法制化を進める戦後の歴史を振り返れば、国旗国歌法制化との抱き合わせで、その端緒としては一九六八年、〈明治百年〉のコメモレーションに関わる政治的力学がある。一九六八年といえば言うまでもなく、〈五月革命〉のその年(昨年は民博での力の入った企画展示「一九六八年」が話題になった)。大島渚監督が翌年封切りの映画『新宿泥棒日記』(横尾忠則が主役で出演)が不穏でアナキーな若者たちを活写したように、遠くなりにける明治の偉業と歴史の蓄積を蹴散らすような現在のエネルギーがふつふつと湧いていた時期であった。

政府が主催し、昭和天皇・皇后夫妻や皇族たちも出席して、日本武道館にて明治百年記念式典がにぎにぎしく挙行されたのは、大島の映画がリンクする新宿騒乱(新左翼の学生たちと機動隊が衝突)の翌々日(十月二十三日)だったことを思い起こしておいてもよいだろう。椋島有三のような右派運動家が左派の学生運動に対抗する組織結成に動いてきたこと、その中から「元号法制化実現国民会議」のような組織が結成されたこと、そして一九七〇年代のこうした一連の運動の潮流から今日なにかと話題になることの多い日本会議も生まれてきたこと、そのような左右対立の時代的機運と元号使用を促す運動とはもちろん無関係であるはずがなかったのである。

明治百年と元号との関わりについては、元号の問題について書かれた最も新しい著作と言える鈴木洋仁『「元号」と戦後日本「明治・大正・昭和」を読む』(青土社、二〇一七)も、そのことを問題化している。〈一九六八年〉が学生運動その他世界同時的な激動の年を指示している一方で、国内的にはその年に〈明治百年〉を祝われる。この対極を鈴木は〈明治〉と〈戦後〉(戦後民主主義)の対立の構図として描きながら、次のように言う。

《しかしながら、(……)「明治百年」は、二項対立の「どちらか」を選択した結果ではなかった。そうではなく、「明治」と「戦後」の両者を、あるいは、そうした複数の線分を混在させ、そして、「戦後」の原型を「明治」に見出していた。この複数性や二重性こそが、この「一九六八年」における歴史意識の非対称性が持つ含意にはかならない。》(同書、二〇七—二〇八頁)

元号法制化を推し進めようとしてきた勢力の本当のゴールはもちろん元号などではなかった。元号法とセットで運動が法制化を主張してきた国旗国歌法は一九九九年に成立した。そしてその先にあるのは改憲であることは言うまでもない(それも九条の前に、二十四条を改訂して家族条項を盛り込むことで、伝統的な日本の家族共同体の復活が目論まれている)。国旗国歌法の成立は、(僕もそうだが)それを拒否してきた人々にとってその傷跡は深く、教育の現場や公務員の位置取り(ポジショニング)に対して抑圧的に働いていることは、これまでの事例からも明らかであろう。国歌国旗について国の答弁は、指導はするが強制はしない、義務づけはしないと言っているにも関わらず、自治体レベルではそうはなっていない。指導とはすなわち強制・義務化であるわけで、そこには巧妙な二枚舌の論理が働いているからだ。

元号は国歌国旗、そして憲法改正(改悪?)とセットで保守派によって法制化が図られてきて、とりあえずそれは実現したものの、「君が代」を歌わせるのと同じ強制力は、そこではまだ働いていない。僕がやってきたように、元号のところに消し線を引いて西暦を書き込んで、処分の対象にはならないはずだ。にもかかわらず、元号が自ずと背負ってしまったものがいかなるものであったかを、元号法成立までの歴史は説き明かしてくれる。その痕跡がいつまでも消えることはないことを、私たちは知っておくべきだ。

さて、いまや〈天皇元首化・憲法改悪〉につながるとして元号法を批判していた日本共産党までが機関紙の『赤旗』で元号・西暦併記を復活させる体たらくに陥っている昨今だが、例えば、祝日になると日の丸が近所の軒のあちこちにかかっていたような風景が遠い昔になってしまった一方で、学校現場での国旗国歌の指導に強制的な法的整備が私たちを取り囲む。おそらく自宅にしまわれた日の丸を見たことのない世代、若者たち投票世代の保守化、自民党支持への傾斜を、メディアも半ば追認的に強調しているが、そこから見えてくるのは、眼前の風景から消えた日の丸や君が代、そして元号の内面化が企まれていることではないだろうか。

昭和天皇が死去して、当時の小渕官房長官（彼は後に総理大臣として国旗国歌法を成立させた）が墨書きされた新元号〈平成〉を会見で発表したときに、僕は思わずのけぞった。実はそれまで、告白すれば、若い文学研究者・大学教授として、明治大正は言うに及ばず〈昭和〉という年号を使ってきた（ただし元号ではなく〈年号〉という意識ではあったが）。〈昭和〉は自分が生まれたときにすでにそれを使うことが慣用化されていて、自分はそれを選ぶ時代に立ち会えなかったが、〈平成〉は違っていた。〈平らに成る〉（平和になる、とも読めるが）、この安っぽくて平凡な二字の漢字は、以後使うまいと心に決めた。

天皇崩御後の異様な自粛ムードが日本を蔽っていたその時期に、僕は自分の最初の単行本の上梓に向けて、最終的な編集作業を進めていた。前述の通り、各章の本文は書誌情報も含めて年号表記になっている。僕の場合近代文学を扱うので、主として用いるのは明治・大正・昭和だが、奥付をどうするかという問題が生じていた。その本（『萩原朔太郎論 《詩》をひらく』、和泉書院）の奥付は結局次のようになった。〈一九八九年四月二日〉。昭和はア・プリオリだからという、自分への言い訳でそのまま残した。しかし、それはどこか二重基準になると、何

より面倒になり、以後はすべて西暦で（平安朝の時代であろうが江戸であろうが）統一して
る。

来年には天皇の生前退位によって平成が別の元号に改まる。そして今年は〈明治百五十年〉
だとか。しかし僕にとって確実なことは、どんなに美しい二字漢字が選ばれようと（いっそ八
世紀の一時期に見られたように四字にしてみたらどうだとも思うが、それもどうでもいい）、
それを使うことはないということ。それだけだ。

（国際日本文化研究センター教授）

小特集 「元号を考える」

紀年と文字

葛 継 勇

年号とは元号とも呼ばれ、漢字を使って特定の年代に年を単位として付けられるものである。いうまでもなく、年号制度は漢字文化の一つである。

現在では、西暦が多く用いられているが、東アジア文化圏に属する諸地域・国家では、君主制の一環として、近代まで年号使用が一般的であった。

中国では、前漢の武帝時代から年号制度が使用され続けたが、中華民国の成立にしたがい、廃止された。最初の年号は「建元」（元年は紀元前一四〇年）だと説かれているが、これは二十数年後の元鼎三年（紀元前一〇四年）に、武帝の初元に遡って命名したものである。六年後の二元は「元光」、また六年後の三元は「元朔」、さらに六年後の四元は「元狩」とそれぞれ名付けられた。

『管子』には「天道以九制、地理以八制、人道以六制。以天為父、以地為母。以開乎万物、以總一統」とあり、人の道は六を以て制すと記されている。つまり、「六」が天の数（法則）であり、皇帝が天の子であるので、使っているものはすべて「六」で計算すると言われる。『史記』秦始皇本紀には「数以六為紀」とあり、年を数えると「六」を以って基準とされる。

しかし、この六年間を一元とする年号の設定方法は「元鼎」の次の「元封」まで続けられたが、次の年号「太初」は四年間を一元とし、その後の年号「天漢」「太始」「征和」も同様であった（「征和」の次の年号「后元」は后元二年に武帝が崩御したので四年を待たずに改められた）。この六年間を一元とする年号の設定方法を継承したのは、前漢を滅ぼした王莽の新朝の年号「始建国」と「天鳳」である（「天鳳」の次の年号「地皇」は、地皇四年に王莽が殺され、新朝が滅ぼされたので六年を待たずに改元された）。

その後の改元のルールは明確ではなく、祥瑞・災異の出現や、辛酉・甲子の革年なども理由として行われることが少なくなかった。また、代始改元、特に同王朝の二代皇帝以降は、踐祚（即位）の同年同日改元もあるが、翌年を待って元号を改める躰年改元が多く見られる。

だが、明朝になると、初代の太祖から「一帝一元号」となり、清朝もそれを踏襲した。よって、年号を以って皇帝の治世を呼称するようになった。永楽帝・康熙帝などはその好例である。年号の文字について、ほとんどは漢字二文字からなるが、三文字・四文字・六文字の年号もいくつかある。

三文字年号には、王莽新朝の「始建国」（八〇一三）がある。「始建国」三文字は初めて建国することを指すから、「始皇帝」と同じ意味で、年号ではないという説がある。

この後の三文字年号は、南朝梁の武帝時代の「中大通」（五二九〇五三四）と「中大同」（五四六〇五四七）の二つのみである。この二つの三文字年号は、それぞれ前に使われた年号「大通」（五二七〇五二九）と「大同」（五三五〇五四六）の後続であることを表している。

四文字年号で、最初に現れるのは後漢の「建武中元」（五六〇五七）である。周知のように、

この建武中元二年に、倭奴国が後漢に朝貢し、「漢委奴国王」の金印が賜われた。「建武中元」は時には「中元」とも書いてあるから、その以前の年号「建武」との繋がりがあり、もともとの年号は「中元」二字しかないとも言われている。

この後に使われた四文字年号には、北魏の「太平真君」（四四〇～四五二）、武周の「天册万歳」（六九五）、「万歳登封」（六九五～六九六）、「万歳通天」（六九六～六九七）、北宋の「太平興国」（九七六～九八四）、「大中祥符」（一〇〇八～一〇一六）などがあり、「建武中元」を含めても、総計七つしか見られない。

「太平真君」年号は、北魏の太武帝が道教的な「太平真君」号を授けられたことに因んで建てられたものである。武後の周王朝（六九〇～七〇五）が使用した三つの四字年号のうち、「天册万歳」年号は則天武后が「天册」を加えて「天册金輪大聖皇帝」と号した時に改元したものである。「万歳登封」は嵩山に登って封禅を行うため、「万歳通天」は通天宮を建成するたために、それぞれ改元されたものである。また、北宋時代には「太平興国」「大中祥符」のほか、「建中靖国」（一一〇一）があるが、「建中靖国」は僅か一年間しか存在しなかった。よって、四文字年号があまり定型とならなかったことが分かる。

そして、六文字の年号は、西夏の「天授礼法延祚」（一一〇三八～一〇四八）と「天賜礼盛国慶」（一〇六九～一〇七四）があるが、この二つしかなく、また党項族出身の西夏王朝に限られている。

以上のように、漢字二字が中国年号として常に使われており、定型化されていたことが分かる。では、この二文字がどのように選ばれたのであろうか。年号文字使用の回数から見ると、多く使われた「元」「永」「建」「天」「和」「平」「興」「太」「大」「光」などの好字は、帝王の

理想・鑑戒を表し、朝代の献元・改元を祝い、また平和が永続すること、大いに興ることなどを祈念するために選ばれていたのであろう。また、祥瑞、特に靈獸・異鳥などの出現によって改元された時、動物の名（例えば「鳳」「龍」）が使われることが少なくなかった。

ところで、年号制度が日本列島に導入されたのは朝鮮半島より遅れて、七世紀ではないかと言われる。ただし、「乙巳の変」直後に行われた革新政治の一環として建てられた「大化」や「白雉」など年号は、律令制度成立過程における試行的な断続年号に過ぎない。よって、対外関係・国内事情が安定した八世紀初頭に至って、律令法の完成と相俟って制度的に確立された「大宝」年号は最初の正式な年号だと思われる。すなわち、年号の成立は中国より八百年ぐらい遅れている。この点では、中国こそ漢字文化・律令政治に代表される東アジアの最先進国であり、日本がその恩恵にあずかった後進国の一つであることが分かる。

しかし、朝鮮半島・ベトナム地区の多くが、公的に中国年号を大部分そのまま借用してきたのに対して、日本（倭国）では大化・大宝以来、常に独自の公式年号を建て、使い続けてきたのも、事実である。また、欧米文化から強く影響を受けても、現在まで年号を使用し、その伝統を守っていることから、年号制度が日本に深く定着したことが分かる。

明治時代以前、天皇一代に数回改元されることもあったが、明治天皇によって「一世一元」の制が頒布されてから、中国明の「洪武」年号から「一帝一元号」になったのと同じく、天皇一代の元号を一つだけにして、「大正」「昭和」などの年号で天皇を尊称することになっている。

日本では、二字年号の他にも、四字年号が見られ、聖武天皇の「天平感宝」（七四九）、孝謙天皇の「天平勝宝」（七四九〜七五七）・「天平宝字」（七五七〜七六五）、称徳天皇（孝謙天皇重祚）の「天平神護」（七六五〜七六七）・「神護景雲」（七六七〜七七〇）がある。「天平感宝」

とは「三宝の奴」と自称して仏教に帰依した聖武天皇が改元したのである。「天平勝宝」・「天平宝字」は仏教信仰によったが、「天平神護」と「神護景雲」は神国思想・瑞祥に基づいて建てられたのである。

日本史上において、四字年号は以上の五つしかない。他はすべて二字年号であることから、今後も二字年号の可能性が高い。

中国と同じく、日本年号の改元にも六つの条件があった。すなわち、(一)新天皇の更新による政局の変動。(二)新制度・新思想の成立。(三)政変の鎮圧・対外軍事行動の勝利。(四)災異・瑞祥の発生。(五)祭祀・宗教活動の展開。(六)辛酉・甲子の革年、などである。

このうち、(一)(二)(三)は主に、帝王の治世理念を表す儒教の経典から年号に採用されたものである。(四)は祥瑞、特に靈獸・異鳥などの動物(例えば「亀」)の名が使われる。(五)には中国道教的な年号と同じく、日本神道教的な年号が現れている。(六)は十世紀に入り、三善清行の辛酉革命論によって行われたものである。

たとえば、「白雉」「朱鳥」などは瑞祥によって改元されたものであるが、「大化」は中国・朝鮮半島の政治文化的影響のもとで育った年号意識に基づいており、儒教の政治理想たる教化を布いて大いに天下を治せんとすという意の「大行教化」などの漢籍佳句に由来したと考えられる。すでに指摘されているように、日本年号の出典は、ほとんど唐以前に成書した古典籍で、四書・五経と史類が多い。四書は『孟子』『論語』、五経は『尚書(書経)』『周易(易経)』『詩(詩経)』、史類は『史記』『漢書』『後漢書』の前三史、こうした漢籍から多くの年号が採択されている。

現在使用されている「平成」の年号は、『尚書』大禹謨にみえる「地平天成(地平かにして

天成る」から採択されたと思われる。一九九二年一〇月、今上天皇は中国西安の碑林博物館に保存されている『尚書』石碑（開成石経）を観覧されたさうである。

そして、年号改元において、以上の（二）（三）（四）（五）（六）の場合は即座に行われるが、（一）の代始改元は、踰年

改元の場合も多い。特に嵯峨天皇の「弘仁」改元以降、踰年改元が最も多い。これは儒教的な名分論によって、一年に二君主を持つことを避けたためである。しかし、昭和天皇と今上天皇はいずれも前代の天皇が崩御した当日または翌日に即座に、即位・改元が行われたことから、今後も新天皇が即位後、すぐ改元して新しい年号が誕生する可能性が高い。この新しい年号はおそらく四書・五経などの漢籍を典故とし、その時代を反映する好字二字を組み合わせたものであろう。

参考文献

所功『年号の歴史…元号制度の史的研究』雄山閣出版、一九八八年、増補版一九九六年。

（鄭州大学教授）



『尚書』石碑の部分（「開成石経」）、
撮影者：西安碑林博物館研究員 王慶衛氏

小特集 「元号を考える」

弘化年度号勘文のあとさき

磯 田 道 史

京都というのは不思議な町である。妖怪があらわれるように、突如として、古めかしい何百年も前の「物体」が目の前にあらわれる。二年ほど前、私は、その京都に引っ越した。下京の由緒ある寺の築地塀のかたわらに居を定めたものの、知り合いは少ない。寂しくなると、ぶらぶら歩き、万寿寺通麴屋町東入ルまでできたとき、ぼんやりと、

——山城屋に行こう

という考えがおきた。山城屋は京都でもっとも古い部類の古書店で、いまは、

——藤井文政堂

といている。「文政」の年号が店名になっている通り、文政年間（一八一八〜一八二九）の創業で、代々、山城屋藤井佐兵衛の名を世襲してきた。その先祖は、大石内蔵助と並んで赤穂藩浅野内匠頭の家老を勤めた藤井又左衛門と伝えられ、寺町通五条上ルに店を構えている。古文書も扱っているから、自然と、この店に足がむき、のれんをくぐった。

しばらく、店の主人である藤井佐兵衛さんと雑談する。そのうち、佐兵衛さんは席をたって、きまって、こういう。

「せんせ、こんなもんがあるんですけど、ご興味ありますやろか」
そういって、奥から古文書を出してくる。私は、いつも、この瞬間を待っている。
その日も、主人は、そういって、東になった古文書を出してきた。驚いた。それは真正正銘
の、

——年号勘文

であった。年号を変える。つまり、改元をおこなうときに、文章博士とよばれる学者公家たちが新年号の案をたくさん出す。それを公家たちがあれこれ評議して、二案ぐらいに絞り込み、天皇に奏聞する。その新年号の案を書きならべた提案書が「年号勘文」である。私はいった。

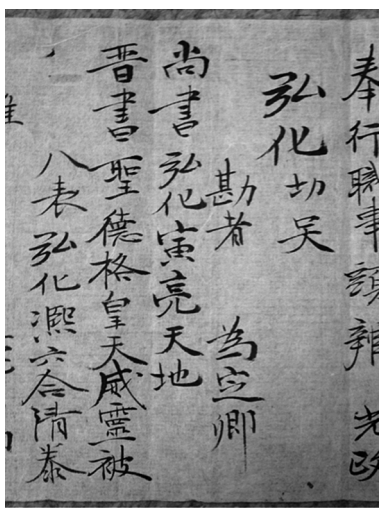
「これは弘化度の年号勘文ではないですか。社家さんか、どこから出た文書ですか」

「いえ。この先に、昔、五条さんの御蔵があつて、そこから出たもんやないか、とおもいます」

佐兵衛さんは、すごいことを平然とといった。古文書をみると、たしかに、そこには

勘者 為定卿

とある（図一参照）。ここにあるのは

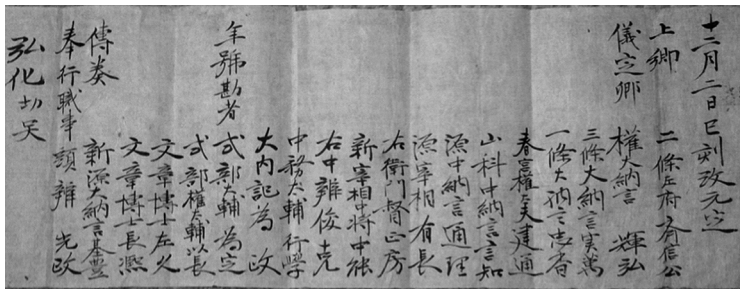


図一「弘化度年号勘文」

幕末の年号「弘化」をきめたときの提案書で、この弘化号を勘申（提案）した本人である五条為定というお公家さんのこのした年号決定会議の書類の控えが、ここにあるらしい。公家は幕末になっても百三十家ほどしかない。そこから直接出て来た年号関係の古文書となると、かなり貴重である。

京都では、こんなすごいものが近所で売られているのか、とおもった。学術的にいえば、年号勘文については国立歴史民俗博物館などで優れた共同研究がおこなわれている。この博物館には公家の広橋家の古文書があつて、そのなかに「日野家代々年号勘文」という中世の年号関連の史料がある。それを使つておこなわれる研究には、私も注目していたが、京都では、幕末ぐらいのものになると、まだ巷に、こういう史料があるのかとおもうと、感慨深かつた。

佐兵衛さんのみせてくれた年号勘文は、ねずみ色をした薄墨色の紙である。これは宿紙といつて、いまは定義がこまかく学術的に論じられているが、宮中の蔵人所で使われてきた独特な紙である。梳きなおしたり、わざと墨をいれて紙に色をつけたりするから、この色になっている。そこに、「上卿（しょうけい）」といつて、改元の責任担当者になつた公家・二条斉信公以下の名前がある。全体をまとめて作業をすすめ



図二

るのが「奉行職」の烏丸光政であり、歴代天皇のおおぼえめでない「伝奏（てんそう）」の広幡基豊もこのなかに入っている。全部で十九人いるから、二十人前後のお公家さんで新年号の準備をしたことがわかる。年号の案を考えるのは、式部大輔や文章博士の公家で、四、五人がこれにあたる。これには菅家つまり菅原道真の子孫が多い。彼らが提案してきた年号案を議論するのが「儀定卿」で十人前後が任命されている。この議論は面白い。

——難陳

とよばれる。この年号は、よくない。難がある、と、難癖をつける意見が「難」。

この年号はよい、というのが、「陳」である。

古文書をみると、醍醐輝弘卿が、

「弘化号、大化・文化は治政のよい足跡をみせたが、弘の字には古い例証がないんじゃないか」と、弱い反対意見をのべている。過去の年号の例をとりあげて、あの年号の時代はよかったとか、悪かったとか、論じるのである。これにたいして、久我建通卿らが賛成意見をのべている。「弘化を考証するものになった經典や歴史の文章は美を尽くし、善を尽くしている。よいのではないか」

これをうけて、上卿の二条斉信が、「では、弘化と嘉徳という年号案を、帝に上げるべし」と、最終意見である「判詞」をいって、結ばれている。

ここで練られた年号案は、江戸時代には幕府にも報告される。とくに江戸中期までは幕府の考えも反映されたとされるが、最終的には、天皇が「御爪点」といって、御手の爪でぐりぐりと、紙にかたをつけた年号案の一つに圧痕をつけて、「治定（ちじょう）」する。

江戸時代には、このようにして、年号はきめられていた。しかし、現代社会では、難陳はお

こなわれない。元号の決定過程は秘密のベールにつつまれている。昨年、興味深い決定がなされた。現在の法律では、行政の命令については、意見公募をおこなうことが定められている。しかし、元号については、賛否を国民にひろく問うパブリック・コメント（意見公募）が「そぐわない」として行政手続法の適用除外となった。だから、今では「難陳」はおこなわれない。あるいは、元号をきめる有識者会議では、「難陳」らしきものが、いまもおこなわれているのかもしれないが、そのときの意見が、どこまで記録され、後世に公にされるのか、わからない。まして、百五十年後、平成のあとの元号をきめたときの賛否のさまが、巷の古書店で発見されるなどということは、ないだろう。記録すること、あとで、それをひもとけるようにしておくことが重んじられたかつての姿をおもいながら、私は領けてもらった弘化度年号勘文を大事に抱えて、京町屋のなかを駆けて帰った。

（国際日本文化研究センター准教授）

小特集 「元号を考える」

元号法再読

瀧井 一博

昨年（二〇一六年〔平成二八年〕）八月八日の今上天皇のおことばを受けて（と書くと、日本国憲法の手前問題があるが）、天皇退位の公認とそのため措置が施され、二〇一九年四月三十日に天皇は退位され、翌日五月一日に皇太子が即位されることとなった。これに伴って、現在の元号である平成も改元されることとなる。これは、現行の元号法に基づいている。それは極めて短い法律であり、次の二項から成っている。

- 一 元号は、政令で定める。
- 二 元号は、皇位の継承があつた場合に限り改める。

この第二項に規定されているように、改元は皇位の継承があつた場合にのみ認められることになっている。いわゆる一世一元の制である。周知のように、明治になるまでは、天皇の在位中に改元が繰り返されることも珍しくはなかった。これは元号を建てるということが、天皇の専権と見なされてきたからである。江戸時代のように天皇の権威が形骸化していた時期におい

ても、「我が朝の今に至りて、天子の号令、四海の内に行はるゝ所は、独年号の一事のみにこそおはしますなれ」と新井白石が『折たく柴の記』で述べているように、年号の改定は天子たる天皇に残された唯一の権限と見なされていた。このことに照らしてみれば、一八六八年の明治改元は画期的な出来事であった。これまでの伝統が切斷され、既述の一世一元の制が新たに樹立されたからである。改元の際、「今より以後、旧制を革易し、一世一元、以て永式と為す」との詔が出され、天皇の在位中に改元はなされないこととされた。このことはその後、一八八九年（明治二二年）の皇室典範でも規定され、法制化された（旧皇室典範第十二条「踐祚ノ後元號ヲ建テ一世ノ間ニ再ヒ改メサルコト明治元年ノ定制ニ從フ」）。

このように、一世一元の制の確立は、伝統の繼承ではなく、新たな伝統の創出であった。その意味するところは、江戸時代に天皇の唯一の権限と認められてきた元号制定権の剥奪である。もはや元号を建てることは、天皇が自由に行使できることではなくなった。これまで引いてきた法令の文言をたどってみれば、この点が示唆深く見て取れる。明治元年の改元の詔では、一世一元を今より以後「永式と為す」とあり、天皇の命令の形式をとっている。明治二二年の旧皇室典範では、「二世ノ間ニ再ヒ改メサルコト」とされた。旧皇室典範は国民に対しての法令ではなく、あくまで帝室家憲の位置づけだった（したがって、当初は公布されなかった）。つまり、明治天皇が他の皇族や子々孫々に向けて下した命令の性格を帯びている。そのようななか、「天皇の在位中は元号を改めてはならない」とされたのであるが、それは将来の天皇への在位中の改元の禁止のみならず、自らにもそれを課しているわけで、自らで自らを縛ったことになる。改元が天皇の手の届かない営為となったことを端的に表している。

では、誰が改元するのか。そう考えて元号法の第一項を見てみると、その文言はいささか

ショッピングである。「元号は、政令で定める」。すなわち改元するのは、政府ないし内閣だとされているのである。かつて神聖なる天子の専権であった改元の権利は、いまやその手から奪われてしまったといえる。

というようにことさら書き立てても、「それがどうした」と言われそうである。元号を続けるという前提に立てば、それ以外にどのような方途があるのか。後に首相となる小淵恵三内閣官房長官が、「次の元号は、『平成』であります」と記者会見で公表した映像は年配の人々の脳裏に刻まれているだろう。内閣が元号を定めることが、つましやかではあるが、厳然たる事実として表れていた。そしてそれは自明のこととして受けとめられたのではないか。実際、江戸時代に戻って、元号の制定を皇室の唯一の権限とすべきとの声は寡聞にして聞こえてこない。元号を廃止せよとの意見を別にすれば、耳にするのはむしろ、内閣は新元号の制定を早急に進めて、できるだけ早く国民に公表してほしいとの経済生活上の要請である。

元号制度の本来である中国がそれを廃した今日、単なる紀年法とは異なる元号という制度を有しているのは、日本のみだと言われる（今日の中国では、「民国何年」というが、これはあくまで紀年の一種である）。しかし、日本でもそれは形骸化しているのは否めない。もともと元号とは、時の始まりを定め命名するという皇帝の特権なのであったが、そのようなおごそかな神聖性を現在の日本人が元号に仮託しているとは到底考えられない。元号は単に年号として、紀年の一種でしかなくなつた。その制定者も名実ともに天皇ではなく、いまや内閣が政令によって定めるという便宜的なものとなつた。

思えば、明治国家は天皇制と呼ばれる君主主権の国家体制を築いたのだが、その実態は天皇がその絶大な大権を自ら行使して親政を行うというものではなく、天皇を輔弼する様々な機関

が実際の統治を委ねられていた。天皇機関説という憲法学上の学説がなごらく通説であったように、天皇は国家の統治過程のなかで、ひとつの機関、それもごく消極的な役割を期待された機関に過ぎなかった。戦後の憲法で天皇は象徴となったとされるが、自ら統治を行うのではなく、国民統合の象徴として奥に控えるとの役割は、明治憲法の時代から事実上天皇に付与されていたのである。天皇を伝統から切り離し、新たな伝統のうえに据えるという営みは、明治維新から今日まで連綿と続いてきていることである。繰り返しになるが、元号もはや天皇の特権ではなくなった。

だが、天皇が自らの意思で元号を変える道がひとつ残っていた。それが、自ら退位することである。これとて、生前譲位は政府のみならず国民一般の想定していなかった事態だったのであるから、いわば禁忌手である。だが、今上天皇は、本来極めて消極的なものでしかない日本国憲法下での象徴の役割を積極的に解釈替えることによって、退位を認めさせ、そして元号を変えるに至った。

何のためにあるのか分からずに使用している元号だが、明治以来、国家のなかにとらわれ続けてきた日本最古の家柄の行く末に国民が思いを寄せるよすがではあろう。

(国際日本文化研究センター教授)

小特集「元号を考える」

年月を表象する意図および元号の意味をめぐって

マルクス・リュッターマン

言葉は相互に意図を合わせる媒介であるはずなのに、解釈の地を余す。曖昧さも精密さもよく指摘される。意識媒体（メディア）たる記号は世の、また宇宙までの生活環境の移り変わりを反映し、しかも独自にも多くの思いを造出する中、曖昧及び精密の両義を運ぶ。したがって人界での「意」を「理解」する為には魂のキネマティクスを学ぶ術を開発せざるに通れない。勿論、時号の学びも同前。

漢の建元、満州国の康德、大韓帝国の光武、そして日本国の大化、明治、平成など。年号も解釈の地を余す。文字、絵、その他の諸々の史料（言語、音楽、道具など）のように年号自体も意を語らない。我々は問いかけてから初めて答えを得る。

年号は典拠不明も少なくないが、はっきりしても、その意味は曖昧のままが多い。例えば一九八九年から「平と成す」か「平らになる」かといった風の議論は絶えない。中国の典拠もいくつかの候補がある。しかし、冒頭で言ったように、本来は明快に宣言したはずであった名称が精密さに欠ける逆説的な性質は「不自然」ではない。春にては小鳥のように、秋にては虫のように、共存の生物の間では同調が測れるもので、既存のものではない。バイオリンがピア

ノに接して、先づは調律し音程や節を定める。男が女を求めて、長く呼び続け、すなわちヨバイ（呼ばひ）をする。暦、時計、年号などの時号もまた農業をはじめとして、生活をチューニング。私達の思念も言動も曖昧さと調律の間に揺れる。この性質こそは対応性を保証し、いわば変わりやすい環境への適応性を保存しているかもしれない。

ハンス・ファイヒンガー (Hans Vaininger, 一八五二—一九三二) の提唱した「かのように」に従えば、受信したデータをいわば「そのまま」には念頭に蔵せず、むしろ記憶は常にダイナミックに過渡して、数式にあるようなイコールの左右に妥当なものを彷彿させようと置き換えを繰り返す。対して、天台智顛（五三八—五九七）講義集によれば意識の移り変わりはむしろ苦悩の元であるという。そのタイトル『摩訶止観』に端的に求められている通り、受信したものの及びそのデータによる衝動をいかに鎮めうるかという大義を取り上げる。結局のところ、鎮めについては言葉が足りなく、醍醐味へ直線の案内も能わず。禅の公案の如く、伝承上でジレンマに陥りながら悟りを待つ。

学問でも、矛盾を原動力としている。矛盾とこそぶつかれば、議論が解消に向かう。ところが、矛盾を解いても、徹底的な悟りを拒んでいる。大概、認識の賞味期限は醍醐味のほど永いものでありえない。学問のみならず、文化という現象も輪廻のように絶え間なく置き換えられる。大自然の経過中の一コピーとして我々人間の意識が現れ、何重もの構成をなし、シグナル受信の五感、その骨、気管、脈管、神経の迷路を始め、ニューロン発火まで「置き換え」が生じ、連動し、発達する。そして、無形の精神を反映する表意に動作の以心伝心、歌の情緒、音楽の感性、絵画の美観、図録の気鋭さ、文章の細かさあり。楽譜、図録、そして「置き換え」の王冠とも称すべき「文字」がそれを支える。風景を描写し、さえずりを真似て、谷川の

せせらぎを響かせ、翁を眩かせ、子のワイワイガヤガヤまで写す。数式だけでは叶わない、最も人間らしいメディアにもっぱら言語が同調を計っても、訳さなければ通じない。この困難さはファイヒンガーの提唱した「かのように」によってうまく表現されたと、私は思う。

智顛はこのことを承知の上、苦悩の原因とみなし、克服を止観に求めた。移り変わりの激しい衝動を司れば、救われよう。牛を乗りこなす農夫のように、あたかも御者のごとく。身さえ修めれば良い。しかし同時に、個人の選ばない親、選ばない言語環境、選ばない情緒、選ばない感性、選ばない風景による制限、体や、能力のような有限の要素とも付き合わざるを得ない。ひいては条件と先天とに対処するうちにまた拘束ばかりされてはいないと気づく。そこで修練、昇華、演習などを心がければ、「かのように」の記号に満ちた選択肢が浮かんでくる。自身を指南すれば既往のスジから脱線も、あるいは転換もするかも知れないが、いわゆる「自由」に恵まれるようだ。先天と自由との間では目標や理想が率いている意図性に人間文化の根元が求められる。人類は自然科学と文化学との狭間を見抜けなければ御者上手にならない。

元号は年やリズムの計測法などの一次的な天文学に根ざす暦学に次いで、二次的な記号として掲げられる。権力者は混乱を無くして平和の印を呪(まじな)いに。釜より湯気が、屋上から煙が突き抜け尽きぬ繁盛の兆しを念願に秩序を保守する望み及び実力を表意。エポック(epoque II 抛り所)を指定して、古典の引用を割り当て、市民の感性に作用を及ぼそうとする。あるいは違和感を抱かせ、あるいは無関心も起こす。天明、天正、天永と雖も天文学的な時間よりははるか狭義の時間概念なので、元号は優れて社会的に、政治的に制限される。人間の共同行為、協力もしくは権力関係(推進、勸業、指南)を呼び起こすスローガンは例えば閣議で元号を改める政令のように発布される。「元」の文字通り本質的には前向きの名称で、「旧石器

時代」、「室町時代」、「ワイマール共和国」や、絶対主義、産業革命、ルネサンスの類、つまりは記憶上で技術、国政の場所や制度、社会事情を後からか晚期にいたって纏める呼称とは異なる。

しかし、国民には二次的な時号が必要か。または無い方が良いか。仮に民意が前者に落居したとするならば、いかなる方法で議論し、決定するかは公儀されている。事実、閣議は天皇の存在に執着し、由緒を重んじ、その登位、退位、在位中の希ごとを機にして年次を改める。もし、天皇の地位に関係なく例えば衆議院選挙ごとに、あるいは単に十年ごとにあるいはまた大災害ごとに事始めの宣言を国民が提案、投票などで決定すれば、多くの人々の心情は変わるかも知れない。いづれにしても、国の年号を忌避する人々はいわゆる西洋曆のみ使用する域へ脱出しようとしても、結局キリスト教の伝道に乗り、別種の理念的包括主義に隸属する結果となって、民の由来系統論を中心とする天皇崇拜に代わり、国境を越える特殊な神とその子を祝う信念をとるのである。

そもそも時号を全く無くして、人間文化は有り得るのだろうか。その先例は見当たらない。十二月と言って、繰り返す月は満ち、減る。と言っても、その順序では四季が合わなくなってしまう。例えばナイル川の氾濫が古代エジプト年の原点だが、シリウス出現の日とあい重なり、そして結局ずれてしまった。また、太陽の影を測って、三六〇日に五日を足しても、シリウス出現の日も一年ごとに〇・二五日ずれてしまい、四年ごとの閏年を必要とした。故に四年ごとにより一日が加算される慣例、現在に至る。しかし、安定するような周期性を保証する術はない。原子時計の進む具合（遊離原子の電子遷移周波数）も遅かれ早かれ不精密に終わる。いづこの軌道及び天体とを比べるかによって、多種の周期が生じる。そして観察者が動かざるを得

ない故、そのデータは全く相対的なものになる。重力も、観察の受感もさし止められない。一旦、太陽を一周しても、その円（近代では楕円）を計算した場合、いかでか三六〇度と計測するに至って、いかでか現代までに一時間は六〇分、一分は六〇秒と準え、六十に進む法をとるか。また、どういうわけで一〇〇度、一〇〇〇度と十進法に沿えないのだろうか。単純に言えば、バビロンの六十進法が定着してから根強く尾をひくためである。昔、ある「かのように」から発して伝播した。十二回の満月はまず一年に近づいた計算、一ヶ月も三十日間と見ることから単純な算式。十二×三十は三六〇。この計算法は時間の感覚を司る天の運動学に起因して、優れて三光の現象に沿った精神の写實的働きに由来していると思われる。言い換えれば、たまたま地球、月、太陽の数との相互関係による区分法に過ぎない。仮に地球に月が三つあり、太陽は二つあり、それを地球が8型の線で回るとすれば、人間の時号の数字もかなり異なってくることは想像に難くない。時は生き物の意識というメディアにおいて常に環境に準えられ、相対的である。

果たして絶対的な時間はあるのだろうか。宇宙形成史上、空間と運動が発達して、無限に膨張しつつあると推しても、時間をどのように分けて、測れるのだろうか。原子の構成、素子の構成、電線及び天体の構成、銀河の構成などの多様化を「抛り所」として定義して、その形成過程が描かれる。展望も色々。一途膨張し、進化するか。あるいは周期的に宇宙は縮んでは膨張し直すのか。時間の様を線に準えるやら、円を比喻にするやら。しかも「潮」の *ebb* のように周期性も暗示するが、*Zeit*、*time* などの欧語は「分ける」という動詞を語源とする。「劫波」(*kalpa*) は萬の世が生没する一期の意か。十千十二支のサイクルなどの周回と全く逆に、時間は無限に線が登るかも知れない。末法に至れば、何万年後皆無になるのだろうか。列島国

の元号は天皇の系統がずっとその即位につれて区分され、連綿して一線型として続くのか。イエスに負けず、神武を元の元として、昔生すまで。国を治る兆し、その支配下の者共をおしなべて指導する描写を中心に今後も時の区分を行うのか。あるいは、自由に別の「かのように」を選ぶのか。『摩訶止観』の言葉を借りれば、識別は「実」ではなく、「権」ばかり。人類は相互に意を合わせる一方、解釈の地を余す。個々の信念を包括する概念を生み出そうとしても、なかなかうまくいかない（オイクメネーやユニタリアニズムまたはエスペラントのように）。ひいては、かかる時号そのものを抜きにして人類の同調を測れない限り、莊子のいう「忘年」（人間の時空を超越すること）は難しい哉。

（国際日本文化研究センター教授）

慣用句における文化的要素の受容の問題

イーゴリ・ポトーフ

先日、ブリヤート国立大学の日本語講座で日本語を学ぶ学生から質問を受け、久しぶりに非常に戸惑った。その質問を日本語に訳すと、「一回死んだ人が旅を続けることによってありうる？」という意味になる。その学生が翻訳した教科書の例文を見たところ、このあまりにも面白い質問の謎が解けた。彼は、「京都までの予定だったが、足を延ばして神戸まで行ってきた」という例文を翻訳した際、「足を延ばす」という文を日本語の慣用句として認識せずに直訳してしまった。ロシア語にも、「足を延ばす」という慣用句があるのだが、その慣用句はまさに「死ぬ」という意味なのである。

また、ロシア語を学ぶ日本人学生からの質問に困る、という逆のパターンの経験もある。「ロシア人にとって『人を壁の前に立たせる』という行為は、そんなに恐ろしい意味を持つのか」という質問を受けた私は、先ず質問のきっかけとなった資料を調べてみた。今回も誤訳の原因は慣用句の不正確な認識にあった。一般のロシア人は「壁の前に立たせる」という慣用句を「射殺する」の意味で自然に理解するが、ロシア語を学び始めたばかりの学生はこの慣用句を文字通りの意味に解釈してしまったと考えられる。

以上の二つの実例は、外国語における慣用句の正確な理解の難しさを物語る。慣用句は、その国の文化、その国民の発想法を如実に反映し、日常生活と密接な関係を持っている。これら

は、主として国民に広く知られた人物、あるいは、全く無名の人物によるあざやかでの確な表現に由来し、慣用化されたその表現には独特な民族性が付与されている。同じ物、同じ動作、同じ性能、同じ考えを表す場合でも、語彙的な手段が言語によって異なっている。この独特な民族性こそが外国語の慣用句の正確な理解を困難にしている。

ある現実の現象が一つの言語の中で、慣用句的な意味を持つとしても、他の言語において、必ずしも慣用句になるとは限らない。たとえば、日本語の「青田を買う」という慣用句で表される「企業が正規に採用試験の期日より前に、内々に学生と入社の契約をする」という社会的な現象は日本独自のものであり、ロシアの社会で同じ現象は見られない。しかも、「青田の時期に収穫量を見積もり、先物買いをする」という米の購入方法自体も他国に見られない、日本独特の習慣であると考えられるので、ロシア語には同じ意味を表す慣用句が誕生しなかった。このような慣用句の翻訳も大いに日本語学習者を悩ませているに違いない。

現実の認識も民族によってそれぞれで、いずれの言語にも独特な象徴的現象の体系が存在する。この現象は慣用句においても表われる。「as strong as a horse」のように、イギリス人にとってはウマが「健康」の形象であるのに対し、ロシア人にとっては、「雄牛のように丈夫である」という慣用句のように、ウシが「健康」の形象となる。また日本語ではそのウシが、「牛の歩み」のように、歩みの遅いことの形象であるのに対し、ロシア語では、「カタツムリのスピード」のように、カタツムリに移動の遅いイメージが与えられている。自然の物体や日用品などのような具体的概念だけではなく、色や重量などを表す抽象的な概念も慣用句の要素となりうる。たとえば日本語では「クチバシが黄色い」のように、黄色は「年が若く、経験不足で未熟である」という意味を表すが、ロシア人はこの意味を表すために緑色を使うだろう。キ

ルギスでは「猫の鼻」が「短さ」の象徴であり、「猫の鼻のように短い」という慣用句が存在する。ところが、ロシア語には「雀の鼻より短い」という慣用句がある。ロシア人が「短さ」について話すときには、「猫の鼻」ではなく「雀の鼻」という比喻を使うことになるだろう。これに対し、日本語で慣用的に用いられるのは「猫の鼻」ではなく「猫の額」であり、「猫の額」が「狭さ」の象徴となる。

慣用句のもう一つの特徴として、慣用句の構成要素の意味からだけでは全体の意味が理解できない表現、すなわち、もとの意味が拡張または転用され、あるいは、比喻的に用いられて固定した表現であることが、多くの言語学者によって指摘されている。つまり、大部分の慣用句の基底には、比喻的なイメージが潜んでいる。このイメージは伝統的な象徴を元にして成立している。しかし、そのイメージは各言語において、独特な比喻の体系をなしているため、その体系の中に占める位置によっては、比喻的なイメージが他言語とまったく違う意味を表すことがあるのである。

また、言語における比喻の体系が読者の理解を困難にしていることも、十分に考えられる。各言語では歴史的に、それぞれの独特な比喻の体系が形成されており、話者はその体系に従って、適切な比喻表現を選ぶ。「たくさん、多く」の比喻として、ロシア人は「泥のように多い」とか、「池を池にするほど」などと言うが、日本人は「山ほどある」という表現を選ぶだろう。また、日本語にはお金がたくさんあることについて、「唸るほど金を持つ」という慣用句が存在する。

多くの言語には、人間の身体の部分が入った慣用句が数多く見られる。日本語とロシア語の語彙の統計的な調査によると、人間の身体による慣用句は、日本語からは一〇八六句、ロシア

語からは九六〇句を抽出することができる。その内、翻訳時に比喩が一致する慣用句は四七句のみである。また、日本語とロシア語における慣用句の質的側面を分析した結果、ロシア語には腕、腰、尻、脛、睫に関わる慣用句が見られないことが明らかになった。その原因は人間の身体に対する日本人とロシア人の考え方の違いにあると考えられる。

具体的な例を挙げてみると、日本人は「腰」を身体を中心として見ているため、日本語には腰に関わる慣用句が多く存在する。一方、ロシア人にとっては、「腰」より「背中」の方が大事なので、「勝つ」という意味の「背中を折る」、「責任を持つ」という意味の「背中の上に置く」、「最も大事なこと」という意味の「体の背中」などのような慣用句を用いる。「肝」に対する考え方も異なっている。日本語では「肝」が「勇氣」、「度胸」、「雄々しさ」を意味する。しかし、ロシア人は、「肝」に好ましくないイメージを持っている。それが「心底から嫌う」という意味の「全ての肝で嫌う」、「ひどくイライラさせる」という意味の「肝の中に入って人を困らせる」などのような慣用句として現れる。

また、ロシア人と日本人の身体の動作はそれぞれ独特な意味を持つことが、広く知られている。たとえば、自分のことを強調するとき、日本人は鼻先を指すが、ロシア人は同じ意味で鼻先ではなく、胸のあたりを指さす。さらに、相手の不愉快な気持ちを招く身体の動作もある。日本人は相手を「こっちへ来い」と呼び出すときに、手先を上下に振る。しかし、ロシアではこのような動作は犬や猫などのペットを呼び出すときに使うことが多い。このような人間の簡単な動作は、「頭を掻く」、「手をあげる」や「舌を出す」などのような慣用句を生み出してきた。しかし、一見簡単に見える慣用句の直訳は、非常に大きな誤解を招いてしまう。たとえば、ロシア人は日本語の「首をひねる」という慣用句の直訳を耳にしたら、「考え込む、納

得しかねて思案する」意味ではなく、「ぼーっとする」という、まったく違う意味で解釈してしまう恐れがある。

我々は日常生活の中で、自国語の馴染み深い慣用句を深く考えず、すぐ口に出すことがよくあると思うが、異文化の代表者と話し合う場合、たまには相手の文化の特徴を思い出した方がよいのではないだろうか？

（ブリヤート国立大学准教授／国際日本文化研究センター元外国人研究員）

ベトナムのホア・ルー祭―日本の祇園祭との比較―

ゴ・フォン・ラン

はじめに

現在、東アジアおよび東南アジア各国（以下、「アジア」）に住んでいる人々は「個性」をアピールする傾向が増えてきているが、だからといって、この地域で「共同体の連結性」が崩壊したわけではない。

それでは、コミュニティの連結や相互信頼を重視するアジアの社会において、「共同体」の優位性を主張する考え方と、「個性」をアピールする姿勢とを結びつけるものは何か。

私の研究チームは、ベトナムと日本の伝統祭礼の体験から、その問いの答えが、伝統祭礼―各個人のための娯楽性を発揮しつつ、各個人が他者との協働を通じ、団結して共同体の伝統を維持する活動―にあることを見出した。

本稿では、伝統祭礼の例として、ベトナムのホア・ルー祭を取り上げる。私の研究チームは、ホア・ルー祭が、著名な日本の伝統祭礼のひとつである祇園祭との間に、文化的に類似するところがあることを発見した。以下では、ホア・ルー祭を紹介しながら、祇園祭との共通点を探ってみたい。

一、ホア・ルー祭

かつて「チュオン・イエン祭」(長安祭)、あるいは「草旗祭」と呼ばれ、李朝(一〇〇九年)から行われてきたホア・ルー祭は、ベトナムの丁朝(九六八〜九八〇年)、前黎朝(九八〇〜一〇〇九年)や李朝(一〇〇九〜一二二五年)の歴史、および丁部領(ディン・ポ・リン)―当時の大躍越を統一した英雄で、丁朝の建国者―の生涯を再現した伝統的な祭礼である。

かつて、ホア・ルー祭はベトナムの各封建王朝によって厳粛かつ豪華に行われ、阮朝(一八〇二〜一九四五年)のある時期に国礼(国家の祭礼)のかたちで遂行された。しかし、フランス植民地時代(一八五八〜一九四五年)の間、「村のお祭り」として、規模が縮小されて簡易に行われるようになり、一時期は中止されたこともあった。

その後、一九八三年にホア・ルー祭は復興され、ベトナムの特色ある伝統文化や芸術を保存する祭礼として全国に知られるようになった。二〇一六年にはベトナム最大の祭礼の一つとして、ベトナムの無形文化財に認められた。さらに、国家レベルの祭礼として国家の儀式のかたちで行われるよう、文化・スポーツ・観光省で検討されている。また、現在、ベトナム政府は、ホア・ルー祭を「国民の祭礼」として認めることについても検討している。

本祭礼は丁部領の誕生日(旧暦二月一五日)、あるいは、旧暦三月の初旬ごろ(三月六日から一〇日まで、もしくは三月八日から一日まで)に行われている。伝承によると、旧暦三月一〇日は丁部領が皇帝となった日で、三月八日は黎大行(レー・ダイ・ハイン、前黎朝の最初の王)が亡くなった日とされる。

ホア・ルー祭が、李朝から阮朝に至るまで、特に阮朝に国礼となって以降、具体的にどのように行われてきたか、先行研究でもまだ明らかにされていない。ただし、フランス植民地時代

に村のお祭りとして行われていたところに、ホア・ルー祭は、ベトナムのあらゆる伝統祭礼と同様、「礼」と「会」の二つの部分で構成されていたことがわかっていく。

(一)「礼」

基本的にホア・ルー祭の儀式的な順序は、左記の通りである。

丁部領を祀る寺院のお宮開き↓焼香式↓お水取り↓火神輿渡御↓沐浴式（仏像を洗う儀式）↓供物奉呈↓お神輿の巡行↓伝統的な礼拝↓祈祷↓灯籠流し↓感謝の礼

ホア・ルー祭のもっとも重要な儀式は、夜に行われる「伝統的な礼拝」である。丁部領を祀るお宮とともに、高さ約十メートルの庭燎（お宮の庭に立てるトーチ）にもライトが点灯され、鮮やかな光と供え物の色が神秘的な雰囲気醸し出す。その時、五人の儀式担当者（儀式の主



写真一 お水取り行列

催者一人、随行者二人、手伝いの者二人）が約六時間、伝統的な礼拝を行う。これはホア・ルー祭が行われる三日間の夜間に行われ、地域住民や観光客も数多く参加する。

「伝統的な礼拝」がホア・ルー祭の最も重要な儀式とみなされるのであれば、「お水取り行列」は、水を飲むことで、山川の霊気や国の起源、共同体の過去、現在、将来などについて考え、国を建てた丁部領の恩義に感謝するという、「飲水思源」の思想を体现している。

「お水取り行列」は、用意周到に準備される。当日、行列の参加者は朝早く、丁部領を祀る寺院を出発し、ホアン・ロン川（皇龍川）に向かい、川の水を瓶に入れて慎重に運び、寺院を持ち帰る。この行列は、最初に五色旗を持つ一団が二列で歩き、その後ろに「八音」や「太鼓」の囃子の一群、丁部領の仏壇が載せられた「八貢」のお神輿を運ぶ一群、そして丁朝の兵士の衣服を着た健康な男性の若者八人と続く。また、政府や各省県村の代表者や観客も、行列に付き



写真二 お水取り

て行く。これに続き着飾った少女たちが、傘が付いている「八真」のお神輿を運ぶ。最後尾は、老人団体、婦人団体、各地方からの「女官礼拝団体」など、礼物を運ぶ者たちが務める。

(二)「会」

ホア・ルー祭の儀式が終わると、次に「会」、いわゆる娯楽の時間に入る。

遊仙、龍舞、トトーム（ベトナムのカルタの一種）、人文字、競泳、ボートレース（龍をかたどった舟を大勢の漕ぎ手で漕ぐレース）、棒回し、人間将棋、ネムコン（玉入れ）、歌合戦、レスリングなど、ベトナムの伝統的な祭礼における普通の遊び以外にも、ホア・ルー祭特有の遊びもある。それは、「太平」（丁朝で定められたベトナム初の元号）の字を書く競技と、草旗合戦ゲームである。草旗合戦ゲームは、昔、ホア・ルー祭の一つの儀礼として行われていたが、現代では民間の演劇として行われている。

草旗合戦ゲームは丁部領が幼いときによく遊



写真三 草旗合戦ゲームの練習

んだゲームである。現代の民間演劇における草旗合戦ゲームは、丁部領の幼いときについての伝説を再現するだけでなく、民族の勇氣や国の平和と繁栄を象徴する役割も担っている。

・ホア・ルー祭への住民参加

毎年新曆四月ごろになると、チュオン・イエン社（長安社）の住民は、普段の農作業を一時的に休み、地方政府（人民委員会）の管理の下、地域の各グループや社会団体に分けられ、ホア・ルー祭に向け、礼拝儀式の供え物の準備やお水取り行列、草旗合戦ゲーム、「太平」の文字や女官礼拝の練習などに集中する。

具体的には、老人会は礼拝儀式を担当し、丁部領を祀るお宮で「九曲」（丁部領の功績や丁朝の平和・繁栄を賛美する九つの歌曲）を読む。婦人会は女官礼拝や神酒奉呈の練習をする。農民会、退役軍人会や青年団体は、伝統的な芸能や音楽を演じる囃子や竜舞などを担当する。最後に、丁部領が合戦ゲームを興じた年齢である十三歳の少年が六十人ほど選ばれ、ホア・ルー祭で演じられる合戦ゲームを練習する。

ホア・ルー祭にかかる費用は、政府や地方政府から交付される補助金のみに頼るわけではなく、多くは祭礼の遂行者や管理者を含む「慶節委員会」や、ホア・ルー地区に住む住民自らがこの地域で行ったビジネスによって賄ったり、地方政府と関係を持った企業（「孟嘗君」と呼ばれる）の寄付金に頼ったりしている。これらの財源は、祭礼が良好で順調に行われるための重要な役割を担っている。

普段の日常生活では、多少は競争しているチュオン・イエン社の住民たちだが、ホア・ルー祭になると、お互いに協力し、祭礼のために人的リソースや費用を喜んで拠出する。住民の自発性や自主性、また祭礼への喜びや誇りなどは、昔から現在に至るまで、祭礼を維持・保存・

継続することに大きな役割を果たしている。

二、祇園祭との比較

ホア・ルー祭での住民の主な信仰が、国の英雄の丁部領を対象とするものであるのに対し、祇園祭では怨霊や天王が信仰の対象とされている。³³⁾

平安時代の八六九年に平安京（現在の京都）で流行している疫病を鎮め住民の生活を守るために、御霊会という行事が行われた。京都人はこの信仰により、古代から現在に至るまで千年以上、祇園祭の神様を楽しませるため、御霊会や山鉾巡行を続けている。同じ信仰や宗教への信念、強力な霊威を持った神（御霊神）への崇敬を共通して持つことで、京都住民は相互扶助の意識や連帯感を保ってきたのである。

祇園祭のある七月になると、京都の山鉾町に住んでいる住民（山鉾町衆）は、「山鉾町会」か「山鉾保存会」という、彼ら自身が自発的に作った組織で互いに結びつき、山鉾町会長、あるいは、山鉾保存会理事長の指示の下で、役割を分担して協力し、祇園祭の山鉾巡行を行うことに努める。



写真四 祇園祭（後祭）の山鉾巡行

各山鉾町会は「祇園祭山鉾連合会」という組織を作り、祇園祭の遂行や予算の配分、山鉾巡行の順番決定などを相談しながら決める。彼らはほぼ一カ月間で、お囃子、神輿洗、山鉾建て、前祭り（七月一七日）と後祭り（七月二四日）の山鉾巡行など、祭礼の準備を整えている。

三十三の山鉾町では、それぞれが、自らの町の山や鉾を丁寧に保存・復興している。そこで豪華かつ綺麗に飾られた山や鉾は、毎年の巡行で独特の美しさを見せている。一つ一つの山鉾町は小さなコミュニティとなり、山や鉾を信仰や宗教の象徴とし、また町衆の独特な伝統的工芸品産業を次世代に引き継ぎ、祇園祭を続けていく。

伝統祭礼は、コミュニティの文化活動を通して地域の住民と祭礼の参加者を結び付ける。彼らは信仰や文化的価値観を共通に持ち、それを誇りとした。その時こそ、個人間の日常生活における社会的距離や格差、競争心が除去され、人々は一緒に文化を創造したり、文化的価値観を共有したりする。このことが、ホア・ルー祭と祇園祭のもっとも顕著な共通点である。

（付記）

本研究では、グエン・ティ・トゥー・フォン氏（ベトナム文化観光スポーツ省附属国家文化芸術研究所）およびフン・ジエウ・アイン氏（ベトナム社会科学アカデミー）の協力を得た。

（一）二〇一五年四月一七日、ニン・ビン省ニン・ビン市において、ベトナム歴史科学会とニン・ビン省人民委員会共催で、「丁先皇と国家統一事業・チュオン・イエン（長安）祭を国家レベルの祭礼に認定することについて」と題するコンファレンスが開催された。

（二）古代都市の人々は、当時流行している疫病の原因を、政争に敗れて横死した人々の怨霊の祟り、

あるいは異国からやってきた疫神（行疫神）のしわざとみなした。これらへの対策として、御霊会が行われた。

（ベトナム社会科学アカデミー東北アジア研究所・日本研究センター所長／
日文研外国人研究員）

イギリス人宣教師の手紙

石上阿希

二〇一六年の夏は、ロンドン大学SOAS（アジア・アフリカ東洋学院）の図書館にこもり、宣教師の残した手紙類を調査していた。春画をメインテーマとして研究している自分が、なぜそのような資料と向き合っていたのかといえは、特任助教として関わっている「クリシタン文学の継承―宣教師の日本語文学」ユニットの研究の一環としてであった。

人間文化研究機構では若手研究者を対象に海外派遣への助成を行っている。この制度を利用して、八月から一ヶ月間ロンドンに滞在した。SOAS 図書館にはイギリスで最大規

模のキリスト教宣教師関連資料がある。主に十八世紀から二十世紀にかけて多数の宣教師らによる通信、報告、ジャーナル、写真などが含まれている。そこで、今回の滞在では、Council for World Mission Archive の manuscript 部門に保管されたメドハースト (Walter Henry Medhurst, 1796-1857) に関する資料を調査することとなった。

メドハーストはロンドン宣教会員のイギリス人宣教師で、ロンドンに生まれ、少年時代に印刷技術を習得している。宣教会の東洋伝道に応じて一八一六年にマラッカにうつり、教書出版にあたった。一八二二年にはパタビアに赴き、宣教師活動を行い、ジャヴァ、上海でも活動した。そのかたわら、中国語、マレー語、日本語を学び、聖書など翻訳や、教種の辞書編纂を行った。一八三〇年に最初の英和辞書である『An

English and Japanese, and Japanese and English Vocabulary』を刊行した。本書に基づいて井上修理・村上英俊らは『英語箋』と題し安政四年（一八五七）に前篇、文久三年（一八六三）に後篇を編刊している。

SOAS には、メドハーストが一八一四年～一八四三年までジャヴァ、マラッカ、上海、ペナン島、バタビアに滞在していた間に記した書簡やジャーナルが所蔵されている。箱にして十箱、調査で全資料を撮影したがその総数は約二千カットとなった。

ここで、少しSOAS 図書館のスペシャルコレクションルームについて説明しておきたい。この閲覧室では貴重書などを調査することができる。図書館自体は平日ならば九時半から二十時半まで、土日は十時半から二十時半まで開館しているが、ここは九時から十七時まで、水曜と休日は閉室される。出納時間が決まっているので、タイミングによっては時間がかかるが、事前にオンラインで予約が可能のため開室直後からすぐに調査を始めることも可能である。コピー機での複写はできないが、申請をすれば持ち込んだ自分のカメラで無制限で撮影することができる（ただしフラッシュ使用は不可）。図書館のIDカードも研究者であれば即日発行される。

というところで、平日は水曜を除き図書館に籠もりきってメドハーストの手紙を延々と撮影していた（図）。紙などの物資も通信手段も限られていたであろう当時の状況を示すように、手紙の裏表両面に細かい文字でびっしりと文字がしたためられている。滞在地での宣教活動のほか、聖書の翻訳、辞書の編纂など日々の生活は多忙を極めたであろうが、それに加えて手紙やジャーナルで現地の様子を細かに報告しており、メドハーストの信仰に対する熱意がしのばれる。彼の直筆を追い続ける一ヶ月であったが、大英博物館に所蔵されているメドハーストの肖像画 (Mr. Medhurst, in conversation with Choo-Tih-Lang, attended by a Malay Boy) でその容貌を知ることができた。眼鏡をかけた眼差しは、真面目さのなかに若干センチティブな雰囲気たたえており、手紙の文字から受け取る印象と齟齬はない。

今回の滞在中では、思いがけず日本とゆかりのあったもう一人の宣教師のことを知った。メドハーストの調査が終わった後、ロンドンから鉄道で二時間ほどのところにあるノリッチという街を訪れた。イースト・アングリア大学に勤める友人と共に、ノリッチ大聖堂を拝観したときに、私たちが日本人だと知ったガイドさんがあるブランクの前まで案内してくれ



SOAS 図書館調査風景

た。そこには横たわる一人の宣教師と彼をとりまく二人の宣教師が描かれていた。横たわった宣教師の名はウィリアム・イングロット (William Ingfort)、一六二一年に三七歳の若さで亡くなった。彼は宣教のため、長崎に滞在した後英国に戻り、ノリッチ大聖堂のオルガニストになる。その功績をたたえてこのプラークが残されているとのことだった。実は最近、イングロットの子孫にあたる日本人がここを訪ねたそうだ。その方は現在神戸で教鞭をとっているとのことである。

英和辞典を作ったメドハーストであったが、実は一度も日本に滞在したことはない。バタビア時代に日本から帰国途中の外国人たちから様々な日本の書物を得て、編纂の助とした。その中に『訓蒙図彙』も含まれていたことを調査後にユニットメンバーである陳力衛先生から教えていただいた。『訓蒙図彙』(一六六六年序)は京都の儒学者中村惕斎によって編纂された絵入百科事典的書物で、その後何度も増補・改訂版が出された。書物は制作者の意図を離れ、時代や場所を超えていく。二〇一七年七月、『訓蒙図彙』を中心に据えた『絵入百科事典データベース』を公開した。研究者だけでなく、様々な人に活用してもらえればと思っている。

(国際日本文化研究センター特任助教)

映画『ハッピーアワー』によるハッピーな時間
―日文研創立三〇周年記念イベント報告

北 浦 寛 之

二〇一七年五月二六日に日文研の創立三〇周年記念イベントの一環として「映画『ハッピーアワー』上映&監督・主演女優トーク」を京都造形芸術大学構内の京都芸術劇場春秋座で開催し、四〇〇人以上の来場者を集めた。本イベントを企画した立場から、企画の背景やイベント当日の様子、そして映画そのものについて、報告しておきたい。

創立三〇周年記念事業のひとつを映画でやると決まったとき、ほぼ瞬間的にこの映画のことが頭に浮かんだ。三〇周年という特別な舞台に、特別感を生み出せる作品であると考えたからだ。『ハッピーアワー』は濱口竜介監督による、二〇一五年公開の映画である。濱口監督は、この映画で芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞し、主演の田中幸恵・菊池葉月・三原麻衣子・川村りらの四人はロカルノ国際映画祭にて最優秀女優賞に輝いた。他にも国内外の映画祭等で数多くの受賞を重ね、映画ファンならよく知る近年の話題作である。



京都芸術劇場春秋座の客席の様子



濱口監督の挨拶

とはいえ、こうした受賞歴に目を奪われて、この映画を三〇周年イベントで掛けようと判断したわけではない。実際に、私が近年観た映画の中で、もっとも衝撃を受けた作品であり、目を奪われたのは、やはり『ハッピーアワー』という映画自体の力にほかならない。驚くべきことに、主演四人は役者としての実績を持ち合わせておらず、演技未経験である。彼女たち以外の演者たちも、十分な演技経験がないという。出演者は総じて、濱口監督とスタッフが神戸で開催したワークショップの参加者というだけで一般的には無名であるが、にもかかわらず、画面に映る人物たちは鑑賞に堪える十分な存在感を発揮している。

『ハッピーアワー』は、三〇代後半の四人の女性たちの日常を、じつに五時間一七分という大長編で、文字どおり丁寧に描き出す。ただ、この上映時間のほとんどが「ハッピーアワー」であることはない。むしろ、彼女たちそれぞれが、ハッピーではない問題を抱えているか、抱えることになる、その状況に戸惑い苦悩し、葛藤することに物語の力点が置かれている。各自の問題は、恋愛以前の男女関係や、夫婦関係、そしてそこに子どもが絡んだ家族間の話へと及ぶ。さらに、個人の問題が、四人の絆にも影響を及ぼす事態となる。

そこから、果たして彼女たちは真の幸福を見つけ出すことができるのか、といった、青春映画のような気配をこの映画は醸し出すことはない。ただ静かに、じつくりと、カメラは心のバランスを崩した彼女たちを見つめ、その状況を彼女たちがいかに立て直すのか、そしてその先にハッピーだと思える時間がやって来るのかに、観る者の関心を誘っていく。彼女たちの言動は、生々しく伝わり、われわれの日常のどこかで起きている話として迫ってくる臨場感を与えるのである。

上映後、濱口監督と主演の田中さん・菊池さん、日文研の細川教授が参加して、私が聞き手となってトークを行った。おもしろかったのは、臨場感のある、まるで現実の地続きのように見える映画だが、それはリアルを追い求めた結果で達成されたわけではないことである。その最たる例が、事前に行われたセリフの本読みである。出演者は撮影前に、シナリオを見ながらセリフを読み、そして覚える。ただその際、ニュアンスを抜いた感情のない言わば「ゼロ度」の声で読むことが求められた。その状態で、監督は聞きやすいと感じる声の基準音を見つけていく。本番の撮影では、その本読みの声をベースとして、ニュアンスを無理に削ぎ落とすというとは意識せずに、発話してもらおうという演



トークイベントの様子

(右から濱口監督、田中さん、菊池さん、細川教授、北浦)

出が行われた。

なるほど、映画を思い返せば、登場人物のセリフの言い回しは、どこかリアルな自然な発話というよりは、システマティックな雰囲気を感じられた。登場人物たちの声が、ある種人工的に映画の空気感を統一させる役割を担っているのである。トーク終盤に設けた客席からの質問タイムでは、関連する話題で日本映画の巨匠・小津安二郎の名前を口にする人もいた。つまり、小津映画のセリフに感じる不自然さが、『ハッピーアワー』の人物たちのセリフに通じるといえるのである。

こうした壇上と客席との交流も手伝って、トークは予定の時間を超過して盛り上がりを見せた。登壇ゲスト以外にも『ハッピーアワー』の多くのスタッフ・出演者が会場に駆けつけてくれていて、最後には、壇上で一人ひとり挨拶してもらったサプライズの展開になった。日文研の創立三〇周年記念イベントは、こうして『ハッピーアワー』スタッフ・出演者と、立派な環境を提供してもらった春秋座関係者の協力もあり、大成功で終えることができた。ここであらためて感謝申し上げます。

(国際日本文化研究センター助教)

共同研究

(二〇一六年一月一日～二〇一七年三月三十一日)

戦後日本文化再考

(研究代表者 坪井秀人、幹事 磯前順一)

〔共同研究者名〕

浅野麗、石川巧、岩崎稔、大原祐治、岡田秀則、辛島理人、狩俣真奈、川口隆行、北中淳子、北原恵、木村朗子、紅野謙介、高榮蘭、五味洵典嗣、斉藤綾子、佐藤泉、尹芷汐、塩野加織、島村輝、申知瑛、菅野優香、鈴木勝雄、張政傑、長志珠絵、十重田裕一、鳥羽耕史、戸邊秀明、成田龍一、野上元、朴貞蘭、橋本あゆみ、福岡良明、松原洋子、水川敬章、光石亜由美、美馬達哉、村上陽子、李承俊、鷺谷花、渡辺直紀、渡邊英理、沈熙燦、郭南燕、北浦寛之、石川肇、王莞晗、栄元、増田斎、田村美由紀、杉田智美

〔海外共同研究員名〕

酒井直樹、五十嵐恵邦、キャロル・グラック

〔研究発表〕

〈第一〇回研究会〉

二〇一六年一〇月一日

パネル発表「暴力、記憶、公共性——高度経済成長期の思想文化」

岩崎 稔「学生運動の死と暴力——夭折する青春像の捻じれ」

渡邊英理「暴力と公共性——中上健次、路地の思想文学」

二〇一六年一〇月二日

李 承俊「内向の世代」再考——〈空間〉から再び〈時間〉へ

岡田秀則 映画上映、解説『《労働》の発見——映画集団

『青の会』とスポンサード映画の超克』

〈第一一回研究会〉

二〇一六年一月三日

パネル発表「戦後日本文化と“アジア”——複眼的な歴史に

向けた準備作業」

鈴木勝雄 映画上映、解説「一九七〇年代のテレビ・ド

キュメンタリーとアジア」

二〇一六年一月四日

辛島理人「日本・アジア関係からみる戦後文化」

杉田智美「戯曲が語るアジアの女たち——宮本研の引き揚げ

／母／戦後」

北原 恵「『戦争画』概念を問い直す——戦後日本におけ

る言説・研究史の再検証」

浪花節の生成と展開についての学際的研究

〔研究代表者 真鍋昌賢、幹事 細川周平〕

〔共同研究者名〕

芦川淳平、上田学、北川純子、薦田治子、諏訪淳一郎、時

田アリソン、馬場美佳、兵藤裕己、細田明宏、森谷裕美

子、早稲田みな子、渡瀬淳子、延広真治、古川綾子

〔海外共同研究員名〕

瀬戸智子、朴英山

〔研究発表〕

二〇一六年一月二六日

〈第四回研究会〉

朴 英山「朝鮮語浪花節『壮烈李仁錫上等兵』をめぐる

て」

兵藤裕己「明治期の語り物芸能としてのデロレン祭文、そ

して浪花節」

二〇一六年一月二七日

上田 学「活弁レコードにみられる浪花節との関連性——ポ

ン大学のコレクションから——」

〈第五回研究会〉

二〇一七年二月一九日

瀬戸智子「『都新聞』と社会主義刊行物にみる日露戦争後

の浪花節」

浪曲資料（映像・音源）の紹介

二〇一七年二月二〇日

細川周平「戦前昭和の股旅物——浪曲と流行歌」

戦争と鎮魂

〔研究代表者〕 牛村 圭、幹事 ジョン・ブリーン)

〔共同研究者名〕

岩崎徹、大東和重、加藤めぐみ、川村覚文、川本玲子、栗原俊雄、古田島洋介、小堀馨子、佐伯順子、谷口幸代、竹村民郎、等松春夫、永井久美子、西原大輔、眞嶋亜有、吉井文美、吉田優貴、末木文美士、堀まどか、朴美貞、平松隆円、今泉宜子、稲賀繁美、倉本一宏、松田利彦、劉建輝、磯前順一、郭南燕、西田彰一、南直子

〔海外共同研究員名〕

徐載坤、ケビン・ドーク、エヤル・ベンアリ、金志映

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一七年一月六日

倉本一宏「白村江の戦いの鎮魂」

堀まどか「帰還者による戦後文学のなかの『鎮魂』——石

原吉郎、甲斐弦、小林勝を中心に戦後の空気を考える

——

〈第三回研究会〉

二〇一七年三月二七日

〔所外開催〕 聖徳記念絵画館・東京大学駒場キャンパス内ファカルティハウス・セミナー室)

聖徳記念絵画館・調査

特別講演

平川祐弘(ゲストスピーカー)「戦死者のために祈る詩」

全体討論

画像資料(絵葉書・地図・旅行案内・写真等)による帝国領域内文化の再検討

〔研究代表者〕 劉 建輝、幹事 北浦寛之)

〔共同研究者名〕

李応寿、安藤潤一郎、井村哲郎、岡本貴久子、上垣外憲一、岸陽子、小林茂、小林善帆、呉孟晋、白幡洋三郎、姜克実、鈴木貞美、戦晧梅、单援朝、塚瀬進、鳥谷まゆみ、根川幸男、松宮貴之、森田憲司、李相哲、劉岸偉、仲万美子、蔡敦達、呉京煥、陳凌虹、鄭在貞、王确、井上章一、稲賀繁美、伊東貴之、松田利彦、森洋久、韓錫政、陳其松、小園晃司、石川肇

〔海外共同研究員名〕

王中忱、孫江、徐興慶

〔研究発表〕

〈第六回研究会〉

二〇一六年一月一六日

上垣外憲一「石原莞爾の漢口時代（一九二〇～二二）——その東亜観の形成」

バーバラ・ハートリー（ゲストスピーカー）「大陸の空間における女性の身体」

二〇一六年一月一七日

唐 権「日清戦争期の得勝図について」

〈第七回研究会〉

二〇一七年三月七日

（所外開催 ハートピア京都）

講演「ヴィジュアル資料が映し出す—帝国期日本の文化と社会」

司会 佐野真由子

ケネス・ルオフ（ゲストスピーカー）「移動する帝国—戦時観光と絵葉書」

劉 建輝「従軍画家が描いた帝国のフロンティア」

コメンテーター バーバラ・ハートリー

二〇一七年三月八日

張 明傑（ゲストスピーカー）「写真が伝える越境学術—

日本人による清末民国初期の中国撮影を兼ねて」

官 文娜（ゲストスピーカー）「近代日中服飾文化の比較的研究—中流家庭の裁縫を中心に」

栄 元（ゲストスピーカー）「租借地大連における日本

語新聞の事業活動—満洲日日新聞社による『在満児童母国見学団』を中心に」

説話文学と歴史史料の間に

（研究代表者 倉本一宏、幹事 榎本 渉）

〔共同研究者名〕

東真江、石川久美子、上野勝之、内田滯子、大橋直義、尾崎勇、追塩千尋、加藤友康、川上知里、木下華子、小峯和明、佐野愛子、佐藤信、関幸彦、五月女肇志、曾根正人、多田伊織、蔦尾和宏、中村康夫、野上潤一、野本東生、樋口大祐、藤本孝一、古橋信孝、保立道久、前田雅之、松蘭斉、三舟隆之、山下克明、横田隆志、白雲飛、呉座勇一、グエン・ヴァー・クイン・ニュー、榎本渉、荒木浩、井上章一、中町美香子、谷口雄太、龔婷

〔海外共同研究員名〕

グエン・テイ・オワイン、宋浣範、劉曉峰、魯成煥

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一六年一月一〇日

尾崎 勇「源頼朝の旗揚げをめぐる説話の側面―『愚管抄』

と『平家物語』とのあいだ―」

五味文彦（ゲストスピーカー）「説話と日記の間」

宋 浣範「『三国遺事』にみえる災害と救済」

二〇一六年一月一日

蔦尾和宏「『古事談』巻一巻頭話考」

野本東生「『古今著聞集』巻第十三「哀傷第廿一」考」

3・11以後のディスカール／『日本文化』

〔研究代表者 ミッヨ・ワダ・マルシアアノ、幹事 坪井秀人〕

〔共同研究者名〕

石田美紀、久保豊、谷川建司、木村朗子、川口隆行、クリ

ステイーナ・岩田ワイケナント、清水晶子、高橋準、菅野

優香、出口康夫、水谷雅彦、一ノ瀬正樹、近森高明、西村

大志、松浦雄介、アンニャ・ホップ、安本真也、須藤遙

子、馬然、木下千花、大塚英志、北浦寛之、長門洋平

〔海外共同研究員名〕

王向華、金普慶

〔研究発表〕

〈第二回研究会〉

二〇一六年一月二六日

映画上映『波のした、土のうえ』

井出 明（ゲストスピーカー）「東日本大震災とダークツー

リズムについて」

二〇一六年一月二七日

木村朗子「震災文学のホントロジー」

岡村幸宣（原爆の図丸木美術館・学芸員）トーク

卯城竜太（現代アートグループ Chim ↑ Pom・リーダー）

作品発表

〈第三回研究会〉

二〇一七年一月二八日

長門洋平「『風立ちぬ』（宮崎駿監督 二〇一三年）のテク

スト分析」

谷川建司「震災・原発事故の事実と距離を保ちこれを後景

に置いた映画作品から震災後の日本を考える」

ミツヨ・ワダ・マルシアーノ「The Radioactive Art Exhibitions: No One Can Go and See It」

二〇一七年一月二九日

高橋 準「〈想像〉の中の原子力／放射線——日本SF／ファンタジーを読み直す」

木下千花「母体の『環境化』と可視／不可視性」

〈第四回研究会〉

二〇一七年三月一〇日

〔所外開催〕 せんだいメディアアテーク・農家民宿いちぼん星
せんだいメディアアテーク見学

クリステイーナ・岩田ワイケナント「転換期のフクシマ」

柳美里の場合」

柳美里とクリステイーナ・岩田ワイケナントによるディス

カッション

二〇一七年三月一日

〔所外開催〕 石巻市新蛇田公営住宅集会所）

被災者追悼式参加、僧侶・金田諦應氏の講演

二〇一七年三月一二日

〔所外開催〕 ホテルニュー水戸屋）

一ノ瀬正樹「震災関連死の原因について」

近森高明「集合的記憶の媒体としてのモノー痕跡とモニメントという視点から」

比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想——王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼——

〔研究代表者〕 伊東貴之、幹事 倉本一宏

〔共同研究者名〕

青木隆、新井菜穂子、井上厚史、恩田裕正、垣内景子、橘川智昭、権純哲、小島毅、関智英、末本文美土、銭国紅、竹村英二、竹村民郎、田尻祐一郎、土田健次郎、永富青地、西澤治彦、長谷部英一、林文孝、松下道信、水口拓寿、横手裕、李梁、吾妻重二、新田元規、石井剛、伊藤聡、井ノ口哲也、内山直樹、遠藤基郎、大久保良峻、荻部直、黒岩高、岸本美緒、児島恭子、近藤成一、佐々木愛、杉山清彦、高柳信夫、葭森健介、保立道久、李曉東、本間次彦、松野敏之、石川洋、澤井啓一、渡邊義浩、前田勉、渡辺美季、平野千果子、中純夫、古勝隆一、茂木敏夫、井上章一、瀧井一博、ジョン・ブリン、松田利彦、劉建輝、榎本渉、フレデリック・クレインス、マルクス・リュッターマン、佐野真由子、山村奨

〔海外共同研究員名〕

張啓雄、葛兆光、手島崇裕、ベンジャミン・A・エルマン

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一六年十一月一九日

長谷部英二「中国古代における受命改曆思想について」

李 濟滄（ゲストスピーカー）「南朝の貴族制と皇帝権力

—— “門地二品” と “二品才堪” を手がかりとして

——」

葭森健介「中国の天下観と東夷の王権——『漢書』地理志

から『隋書』東夷伝へ——」

〈第五回研究会〉

二〇一七年三月一三日

〔所外開催 東京大学史料編纂所・文学部〕

東京大学史料編纂所見学・史料閲覧

倉本一宏「日本古代君主論をめぐって」

保立道久「日本宗教史と老子——和光同塵と「善人なおも

て往生す」について」

万国博覧会と人間の歴史

〔研究代表者 佐野真由子、幹事 井上章一〕

〔共同研究者名〕

石川敦子、市川文彦、岩田泰、鵜飼敦子、江原規由、神田

孝治、澤田裕二、寺本敬子、中牧弘允、芳賀徹、増山一

成、武藤秀太郎、武藤夕佳里、橋爪紳也、林洋子、稲賀繁

美、瀧井一博、劉建輝

〔海外共同研究員名〕

青木信夫、ウィーベ・カウテルト、シビル・ギルモンド、

徐蘇斌

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一六年一〇月八日

森誠一朗・岸田匡平（ゲストスピーカー）【書評と展望⑤】

陣内秀信（ゲストスピーカー）【書評と展望⑥】

二〇一六年一〇月九日

集中セッション アスタナ国際博覧会をめぐって

藤本透子（ゲストスピーカー）「カザフスタンの文化と社会」

井上 学（ゲストスピーカー）「二〇一七年アスタナ国際

博覧会への日本政府参加について」

江原規由「中国と万博——アスタナ博とドバイ博をみる」

視点

今後の活動計画について、全員討論

〈第四回研究会〉

二〇一六年一月一七日

ソウル番外編研究会 (International Symposium “Expo Land-
scape”) 報告

市川文彦「今後の研究展望——万博の制度論としての展示

スタイルと褒賞制」

今後の活動——「万博学の構築」に向けて、全員討論

二〇一六年二月一八日

木田拓也 (ゲストスピーカー) 【書評と展望⑦】

牧原 出 (ゲストスピーカー) 【書評と展望⑧】

〈第五回研究会〉

二〇一七年二月二五日

佐藤一信 (ゲストスピーカー) 【書評と展望⑨】

井上さつき (ゲストスピーカー) 【書評と展望⑩】

ユク・ヨンス (ゲストスピーカー) 「フランスと日本は

一九三二年パリ植民地博覧会でヴェトナムと韓国をどう
表象したか——植民地近代を再考する」

二〇一七年二月二六日

森 栄子 (ゲストスピーカー) 「二〇二五年大阪万博誘致

事業の進捗状況について」

来年度以降の活動計画について、全員討論

差別から見た日本宗教史再考——社寺と王権に見られる聖と賤
の論理

(研究代表者 磯前順一、幹事 北浦寛之)

〔共同研究者名〕

吉村智博、佐藤弘夫、鈴木岩弓、小倉慈司、片岡耕平、鈴

木英生、小田龍哉、川村寛文、山本昭宏、青野正明、沈熙

燦、高柳健太郎、田辺明生、菊田真司、船田淳一、太田恭

治、浅居明彦、水内勇太、鍾以江、島蘭進、佐々田悠、寺

戸淳子、金沢豊、西宮秀紀、井上智勝、舟橋健太、幡鎌一

弘、鶴見晃、河井信吉、上村静、安部智海、竹本了悟、パ

トリシア・フィスター、マルクス・リュッターマン

〔海外共同研究員名〕

智恵・シユタイネットワーク、ラジ・シユタイネットワーク、ランジャ

ナ・ムコバディヤヤー

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

二〇一六年一〇月一五日

〔所外開催 大阪人権博物館（リバティおおさか）〕

リバティおおさか見学

山本昭宏「網野『無縁・公界・楽』の検討」

コメント・片岡耕平

フィールドワーク・浪速部落と釜ヶ崎・飛田地区（案内・

浅居明彦・吉村智博）

二〇一六年一〇月一六日

水内勇太「エリアーデ聖俗論について」

コメント・寺戸淳子

〈第四回研究会〉

二〇一六年一二月一七日

互盛央『日本人であるために』を読む（司会・山本昭宏）

荻田真司「政治理論の観点から」

鶴見 晃「現場の視点から①」

金沢 豊「現場の視点から②」

網野論を読む（司会・佐々田悠）

小田龍哉「網野『中身分制の一考察』論評」

高柳健太郎「網野『古代・中世の悲田院をめぐる』論

評一

〈第五回研究会〉

二〇一七年二月一八日

磯前順一「来年度の新体制について」（司会・小田龍哉）

磯前順一「討論の仕方の問題点」（司会・金沢豊）

磯前順一・佐々田悠・小田龍哉・片岡耕平・高柳健太郎・

山本昭宏「討論内容の再検証」（司会・船田淳一）

全体討論

〈国際共同研究〉

植民地帝国日本における知と権力

〔研究代表者 松田利彦、幹事 瀧井一博〕

〔共同研究者名〕

飯島渉、岡崎まゆみ、小野容照、加藤聖文、加藤道也、河

原林直人、川瀬貴也、栗原純、慎蒼健、通堂あゆみ、アル

ノ・ナンタ、春山明哲、松田吉郎、宮崎聖子、やまだあつ

し、長沢一恵、李昇燁、中生勝美、稲賀繁美、劉建輝

〔海外共同研究員名〕

陳延溪、李炯植、洪宗郁、山本浄邦（邦彦）、宋炳卷、鄭

駿永、顔杳如、呉叡人、何義麟

〔研究発表〕

〈第四回研究会〉

二〇一六年二月一日

川瀬貴也「雑誌『朝鮮仏教』誌上における日朝仏教の葛藤」

宮崎聖子「植民地期台湾における青年期教育をめぐる知の

標準化」

春山明哲「法学者・岡松参太郎の台湾経験と知の射程―植

民地統治と「法の継受」をめぐる―」

松田利彦「志賀潔とロックフェラー財団―京城帝国大学医

学部長時代の植民地朝鮮の医療衛生改革構想を中心に

―」

鄭 駿永「植民地医学と朝鮮人受刑者―京城帝大精神医学

教室の研究活動を中心に」

来年度国際研究会についての相談

二〇一六年二月一日

通堂あゆみ「『ポツダム博士』にみる帝国の解体と学知」

長沢一恵「戦前期の社会政策法制をめぐる一考察―鶴飼信

成と「社会行政法」を中心に―」

〈第五回研究会〉

二〇一七年二月一日

小野容照「朝鮮民族運動とアジア主義…李達の思想と活

動」

李 容相（ゲストスピーカー）「朝鮮総督府鉄道官僚の特

徴と朝鮮認識」

愼 蒼健（ゲストスピーカー）「同時代朝鮮人医学者の距

離…生理学者・李甲洙と優生学者・李甲秀」

宋 炳卷「東洋社会論と二つの主体」

中生勝美「領台湾初期の原住民調査」

やまだあつし「高等農林学校の植民地知識―鹿児島高等農

林学校を中心に」

来年度国際研究会についての相談

日本語の起源はどのように論じられてきたか―日本語学史
の光と影

（研究代表者 長田俊樹、幹事 井上章一）

〔共同研究者名〕

斎藤成也、安田敏朗、狩俣繁久、千田俊太郎、風間伸次

郎、永澤済、児玉望、菊澤律子、林範彦、アンナ・ブガエ

ワ、福井玲、伊藤英人、鈴木貞美、マーク・ハドソン、平

子達也、杉山豊

〔海外共同研究員名〕

トマ・ペレルル、ジョン・ホイットマン、アレキサン
ダー・ヴォヴィン

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一七年一月七日

千田俊太郎「バブア諸語と日本語の源流」

林 範彦「パーカーと西田龍雄―日本語の起源をチベッ

ト・ビルマ諸語に求めた2人の言語学者―」

永澤 濟「日本語史研究における実用文書資料の可能性―

和化漢文の分析を例に―」

共同研究のまとめについて

二〇一七年一月八日

菊澤律子「書評 松本克己著『世界言語の中の日本語―日

本語系統論の新たな地平』『世界言語への視座―歴史

言語学と言語類型論』（いずれも三省堂）」

アンナ・ブガエワ「東北アジア言語の観点から見たアイヌ

語の言語類型論的考察」

マーク・ハドソン「琉球・千島列島におけるヒトの居住、

社会ネットワークと言語の歴史」

投企する古典性―視覚／大衆／現代

〔研究代表者 荒木浩、幹事 稲賀繁美〕

〔共同研究者名〕

飯倉洋一、伊藤慎吾、上野友愛、岡田圭介、河東仁、恋

田知子、河野貴美子、河野至恩、合山林太郎、齋藤真麻

理、竹村信治、中野貴文、中前正志、野網摩利子、三戸

信恵、箕浦尚美、山本陽子、渡部泰明、渡辺麻里子、アン

ダソヴァ・マラル、石上阿希、呉座勇一、土田耕督、徳永

誓子、漆崎まり、ゴウランガ・チャラン・プラダン、チャ

ン・ティ・チュン・トアン、ガリア・トドロヴァ・ペトコ

ヴァ

〔海外共同研究員名〕

楊曉捷、山藤夏郎、李愛淑

〔研究発表〕

〈第三回研究会〉

〔所外開催 慶應義塾大学三田キャンパス〕

二〇一六年二月三日

石上阿希「二〇一六年ロンドン調査・見聞報告」

渡辺麻里子「寺院資料調査の意義と記家文字資料」

二〇一六年二月四日

飯倉洋一「国際的くずし字教育の現状と展望―学習アプリ

KULAの利用を中心に―」

〈第四回研究会〉

〈特集〉対論的シンポジウム―絵巻と漫画をめぐる

二〇一七年一月二二日

山本陽子「絵巻はマンガの祖先か?―絵巻とマンガの表現を比較する―」

佐々木果(ゲストスピーカー)「漫画の成立における欧米の影響と日本語の問題」

デイスカサント・楊 曉捷・李 愛淑

二〇一七年一月二二日

竹村信治「学校の古典―投企のカタチ―」

デイスカサント・山藤夏郎

(文責:研究協力課)

基礎領域研究

韓国語運用の応用(継続)

代表者 松田利彦

概要 研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対し、会話、読解、聴解の習得を目指した授業を行う。

古記録学基礎研究(継続)

代表者 倉本一宏

概要 日本前近代の根幹的史料である古記録の解読を、原本や写本の見方・扱い方も含めて考えていく。大学院生・教職員・他大学の院生・研究者の参加も歓迎する。

フランス語基礎運用(初級)(継続)

代表者 稲賀繁美

概要 初心者を対象として、初歩の運用能力を実践的に身に付ける。教科書としては当該年度のNHKラジオ講座教材の準備を参加者各自に願う。他の教材は現場で提供する。

フランス語読解補助・論文作成指南(中級)(継続)

代表者 稲賀繁美

概要 中級以上の実務能力開発、論文作製の手ほどきをすすめる。教材については、受講生との相談のうえで決定する。

中世文学講読（継続）

代表者 荒木 浩

概要 中世文学の影印本の読解を軸に、古典テキストの研究方法を考察する。

文学・文化史理論入門（継続）

代表者 坪井秀人

概要 文学および文化史に関する基礎的な理論を学びながらテキストの読解・分析の実践的方法を修得する。

近現代史史料文献研究（継続）

代表者 瀧井一博

概要 日本近現代史の基礎史料と古典的および先端的な文献を講読し、社会科学的な歴史研究の方法と実践を討究する。

彙報

(平成二八年一〇月一日)

平成二九年三月三十一日

人事異動

◎平成二八年一〇月一日 採用
助教 吳座勇一

プロジェクト研究員 エルナンデス・エルナ
ンデス・アルバロ・ダビド

技術補佐員 根川幸男

◎平成二八年一〇月一日 併任

副所長 劉 建輝

◎平成二八年一〇月一日 契約

(客員)

外国人研究員 チャン・ティ・チュン・トア

ン(ハノイ大学准教授)

◎平成二八年一〇月一日 契約

(客員)

外国人研究員 葛 継勇(鄭州大学副教授)

◎平成二八年一二月三〇日 契約満了

(客員)

外国人研究員 山崎佳代子(ベオグラード大
学教授)

◎平成二八年一二月三十一日 契約満了

(客員)

外国人研究員 姜 龍範(延辺大学教授)

◎平成二九年一月一日 契約

(客員)

外国人研究員 パート・ウインザー・タマキ

(カリフォルニア大学アーバイン校教授)

◎平成二九年一月三十一日 契約満了

(客員)

外国人研究員 周 闓(北京語言大学教
授)

外国人研究員 マティアス・ハイエク(パ
リ・デイドロ大学准教授)

◎平成二九年二月一日 契約

(客員)

外国人研究員 ニコラ・フィエヴェ(高等研
究実習院教授)

◎平成二九年二月二八日 契約満了

(客員)

外国人研究員 宋 浣範(高麗大学校グロ
バル日本研究院教授・副院長)

◎平成二九年三月三十一日 契約満了

(客員)

外国人研究員 官 文娜(香港中文大学アジ
ア太平洋研究所助教)

◎平成二九年三月三十一日 転出

東京大学総合博物館准教授 森 洋久

◎平成二九年三月三十一日 任期満了

機関研究員 中町美香子

機関研究員 陳 其松

技術補佐員 徳永誓子

技術補佐員 長門洋平

日文研フォーラム

第三〇四回「平成二八年一〇月四日(火)」

発表者 マッツ・カールソン(シドニー大学
シニア講師/日文研外国人研究員)

テーマ 木下恵介映画の見どころ——忘れら

れた日本のこころ

コメンテーター 細川周平教授

第三〇五回「平成二八年一月一五日（火）」

発表者 山崎佳代子（詩人・ベオグラード大

学教授／日文研外国人研究員）

テーマ セルビア・アヴァンギャルド詩と

『日本の古歌』

コメンテーター 沼野充義（東京大学教授）、

細川周平教授

第三〇六回「平成二八年一月一三日（火）」

発表者 姜 龍範（天津外国語大学教授／日

文研外国人研究員）

テーマ 北朝鮮の核問題と中国の新たな朝鮮

半島政策

コメンテーター 松田利彦教授

第三〇七回「平成二九年一月一〇日（火）」

発表者 マティアス・ハイエク（パリ・ディ

ドロ大学准教授／日文研外国人研究員）

テーマ 近世前期の学識と実学を再考するー

京都の博学者、馬場信武を中心に

コメンテーター 嘉数次人（大阪市立科学館

学芸担当課長）

第三〇八回「平成二九年二月一〇日（火）」

発表者 宋 浣範（高麗大学校グローバル日

本研究院副院長／日文研外国人研究員）

テーマ 京都から考える「東アジア安全共同

体」——「戦争」「災害」「歴史」をキ

ワードとして

コメンテーター 金野 純（学習院女子大学

准教授）

木曜セミナー

第二三一回「平成二八年一〇月二〇日（木）」

話者 ジェームス・E・ケテラー（シカゴ

大学教授）、磯前順一教授

テーマ ミッシング・ヒストリー

第二三二回「平成二八年一月一八日（木）」

話者 今井秀和機関研究員

テーマ 江戸期における仏像の妖怪化

第二三三回「平成二八年一月二二日（木）」

話者 石川 肇助教

テーマ コロンブスの卵ー資料の見せ方

第二三四回「平成二九年一月一九日（木）」

話者 マーク・E・リンシカム（京都アメ

リカ大学コンソーシアム所長）、マティア

ス・ハイエク（パリ・デイドロ大学准教授

／日文研外国人研究員）

テーマ 来たるべき日文研 高等研究所とは？

コンソーシアムとは？

コメンテーター 松田利彦教授、磯前順一教

授

第二三五回「平成二九年二月一六日（木）」

話者 呉座勇一助教

テーマ 南北朝時代の戦術と武士

Nichibunken Evening Seminar

第二二一回「平成二八年一〇月六日（木）」

発表者 バーバラ・ハートリー（タスマニア

大学シニア講師／日文研外国人研究員）

テーマ The Poetry of Takarabe Toriko: Elegies

of Children, Women and War

第二二二回「平成二八年一月二日（水）」

発表者 マッツ・カールソン（シドニー大学

シニア講師／日研外国人来訪研究員)

テーマ The Rise and Fall of Kinoshita

Keisuke's Films: Critical Perspectives

第二一三回 [平成二八年一月八日(木)]

発表者 ジョアンナ・マッカラム(フアルマ

ス大学大学院博士課程／日研英国芸術・

人文リサーチカウンシル研究員)

テーマ Nature as Master? Exploring Affect,

Environment, and Shinto-Buddhist Traditions

in the Craft of Japanese Bamboo Basket Mak-

ing

第二一四回 [平成二九年二月二日(木)]

発表者 詹 晏怡(カンザス大学博士候補者

／総研大研究生)

テーマ Family Memories in Place, Time, and

Motion: The Kotukuji Nan'endō and Its Bud-

dhist Icons

第二一五回 [平成二九年三月二日(木)]

発表者 ヤン・シーコラ(カレル大学准教授

／東アジア研究所副所長／大阪大学招聘教

授)

テーマ *Consume or Perish?: Making of Con-*

sumer Society in Interwar Japan

学術講演会

第六四回 [平成二九年三月九日(木)]

講演者 古川綾子特任助教

テーマ 上方喜劇の現代性―曾我廼家劇から

松竹新喜劇まで

講演者 井上章一教授

テーマ 日本の大衆文化とキリスト教

司会 楠 綾子准教授

日研・アイハウス連携フォーラム

第九回 [平成二八年一月一日(金)]

講演者 稲賀繁美副所長／教授

テーマ 海賊史観からみた世界史500年―

『文明の海洋史観』の裏側を覗く

第一〇回 [平成二九年一月二〇日(金)]

講演者 郭南燕准教授

テーマ 志賀直哉の文学・外国語からの養分

日研・アイハウス連携フォーラム 京都

[平成二九年三月七日(火)]

講演者 ケネス・ルオフ(ポートランド州立

大学教授)

テーマ 「移動する帝国」――戦時観光と絵

葉書

講演者 劉 建輝副所長／教授

テーマ 従軍画家が描いた帝国のフロンティ

ア

一般公開

[平成二八年一月二九日(土)]

【日研データベースで遊ぼう】

紹介者 磯田道史准教授、フレデリック・ク

レインス准教授、森 洋久准教授、石上阿

希特任助教、今井秀和機関研究員

進行 井上章一教授

【創立30周年イベント「浪曲を聴く会」】

出演者 京山幸枝若、京山小圓嬢

ゲストスピーカー 真鍋昌賢客員教授／北九

州市立大学教授

司会・コメンテーター 古川綾子特任助教

【日本初の著作権訴訟―浪曲師・桃中軒雲右衛門事件―】

講師 山田奨治教授

司会 榎本 渉准教授

海外シンポジウム

〔平成二八年一月二四日(木)〕～一月二五日(金)〕

テーマ 南太平洋から見る日本研究…歴史、

政治、文学、芸術

場所 オタゴ大学(ニュージーランド)

シンポジウム

〔平成二八年一月二五日(月)〕～一月二七日

(水)〕

テーマ 鈴木大拙を顧みる…没後50年を記念して

場所 国際日本文化研究センター

レクチャー

第一四八回〔平成二八年一月二二日(水)〕

発表者 ロイ・スターズ(オタゴ大学准教授)

テーマ Japan's Perennial New Man: The Liberal and Fascist Incarnations of Royama Masamichi

主宰者 ジョン・グリーン教授

第一四九回〔平成二八年一月二二日(月)〕
発表者 竹村民郎(元大阪産業大学教授)

テーマ 「職場の歴史」とはなにか?

主宰者 稲賀繁美副所長・教授

特別講演会

〔平成二九年三月二八日(火)〕

小松和彦所長文化功労者顕彰記念講演会

講演者 小松和彦所長

テーマ 妖怪と戯れて四〇年―私の学問人生

司会者 劉建輝副所長・教授

会議

運営会議

第四三回 平成二八年 二月 九日(金)

第四四回 平成二九年 三月一〇日(金)

調整会議

第二六三回 平成二八年 一〇月 五日(水)

第二六四回 平成二八年 一〇月 九日(水)

第二六五回 平成二八年 十一月 二日(水)

第二六六回 平成二八年 十一月 五日(火)

第二六七回 平成二八年 十一月 七日(水)

第二六八回 平成二八年 十二月 二日(水)

第二六九回 平成二九年 一月 四日(水)

第二七〇回 平成二九年 一月 八日(水)

第二七一回 平成二九年 二月 一日(水)

第二七二回 平成二九年 二月 五日(水)

第二七三回 平成二九年 三月 一日(水)

第二七四回 平成二九年 三月 五日(水)

センター会議

第二六三回 平成二八年 一〇月 六日(木)

第二六四回 平成二八年 一〇月 二〇日(木)

- 第二六五回 平成二八年 一月 四日(金)
- 第二六六回 平成二八年 一月一八日(金)
- 第二六七回 平成二八年 二月 八日(木)
- 第二六八回 平成二八年 二月二二日(木)
- 第二六九回 平成二九年 一月 五日(木)
- 第二七〇回 平成二九年 一月一九日(木)
- 第二七一回 平成二九年 二月 二日(木)
- 第二七二回 平成二九年 二月二六日(木)
- 第二七三回 平成二九年 三月 二日(木)
- 第二七四回 平成二九年 三月一七日(金)

外国人来訪者

- 平成二八年一月二日 国際交流基金関西西
 際 センターご一行、計一八名
- 平成二八年一月二五日 京都 FORUM
 2020参加者、計二一名
- 平成二八年一月七日 国際交流基金関西西
 際 センター・平成二八年度ロシア若手研究
 者育成プログラム参加者ご一行、計一二名

海外渡航

- 倉本一宏 教授
 目的 マドリード・コンプルテンセ大学に
 て総会参加
 目的国 スペイン
 期間 平成二八年一月二日〜九日
 ジョン・ブリン 教授
 目的 マドリード・コンプルテンセ大学に
 て総会参加
 目的国 スペイン
 期間 平成二八年一月二日〜二日
- 荒木 浩 教授
 目的 フランス社会科学高等研究院にて人
 文機構とフランス社会科学高等研究院との
 協定調印式出席、パリ日本文化会館にて
 人文機構とパリ日本文化会館との協定調印
 式出席及びシンポジウム出席、ギメ東洋美
 術館にて調査及び情報収集
 目的国 フランス
 期間 平成二八年一月六日〜一日
- 瀧井一博 教授
 目的 華東政法大学にて講演
 目的国 中国
 期間 平成二八年一月一日〜四日
- 小松和彦 所長
 目的 コレージュ・ド・フランスにてシン
 ポジウム参加及び講演
 目的国 フランス
 期間 平成二八年一月一九日〜二二日
- 山田奨治 教授
 目的 パリ政治学院にて学会出席
 目的国 フランス
 期間 平成二八年一月一九日〜二三日
- 坪井秀人 教授
 目的 コロンビア大学にてワークショップ
 参加及び報告
 目的国 アメリカ
 期間 平成二八年一月一九日〜二四日
- 佐野真由子 准教授
 目的 ソウル大学校国際大学院にて国際学
 術大会運営委員会参加

目的国 韓国

期間 平成二八年一〇月二〇日〜二二日

稲賀繁美 副所長

目的 台湾工科大学にてカンファレンス参加及び講演

目的国 台湾

期間 平成二八年一〇月二五日〜二九日

吳座勇一 助教

目的 国立釜慶大学にて国際学術大会参加及び史蹟踏査

目的国 韓国

期間 平成二八年一〇月二八日〜三一日

佐野真由子 准教授

目的 ソウル国立大学環境大学院にて国際シンポジウムに参加

目的国 韓国

期間 平成二八年一月三日〜六日

倉本一宏 教授

目的 ハノイ国家大学人文社会科学学文学科にて講義

目的国 ベトナム

目的国 ベトナム

期間 平成二八年一月五日〜一日

吳座勇一 助教

目的 ハノイ国家大学人文社会科学学文学科にて講義補助

目的国 ベトナム

期間 平成二八年一月六日〜一日

劉建輝 副所長

目的 清華大学にて事前調査及び打合せ、フォーラムに出席及び発表

目的国 中国

期間 平成二八年一月八日〜一三日

郭南燕 准教授

目的 上海図書館及び上海図書館徐家匯蔵書樓にて調査

目的国 中国

期間 平成二八年一月九日〜一五日

小松和彦 所長

目的 清華大学にて講演

目的国 中国

期間 平成二八年一月一〇日〜一二日

大塚英志 教授

目的 清華大学にてフォーラム出席及び発表、北京外国語大学等にて打合せ

目的国 中国

期間 平成二八年一月一〇日〜一五日

大塚英志 教授

目的 BEXCO 及び Sogang University での司会及び講演

目的国 韓国

期間 平成二八年一月一六日〜二〇日

郭南燕 准教授

目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加

目的国 ニュージーランド

期間 平成二八年一月二一日〜二七日

瀧井一博 教授

目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加

目的国 ニュージーランド

期間 平成二八年一月二二日〜二六日

小松和彦 所長

目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加及び発表

目的国 ベトナム

- 目的国 ニュージーランド
 期間 平成二八年一月二二日～二七日
 稲賀繁美 副所長
 目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加
 目的国 ニュージーランド
 期間 平成二八年一月二二日～二七日
 荒木浩 教授
 目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加
 び発表
 目的国 ニュージーランド
 期間 平成二八年一月二二日～二七日
 井上章一 教授
 目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加
 び発表
 目的国 ニュージーランド
 期間 平成二八年一月二二日～二七日
 ション・ブリン 教授
 目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加
 び発表
 目的国 ニュージーランド
 期間 平成二八年一月二二日～二七日
 坪井秀人 教授
 目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加
 目的国 ニュージーランド
 期間 平成二八年一月二二日～二七日
 パトリシア・フィスター 教授
 目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加
 目的国 ニュージーランド
 期間 平成二八年一月二二日～二七日
 佐野真由子 准教授
 目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加
 目的国 ニュージーランド
 期間 平成二八年一月二二日～二七日
 石上阿希 特任助教
 目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加
 び発表
 目的国 ニュージーランド
 期間 平成二八年一月二二日～二七日
 北浦寛之 助教
 目的 オタゴ大学にてシンポジウム参加
 び発表
 目的国 ニュージーランド
 期間 平成二八年一月三〇日～二月一日
 松田利彦 教授
 目的 Songdo Convensiaにて国際学術大会
 参加
 目的国 韓国
 期間 平成二八年一月二二日～二七日
 小松和彦 所長
 目的 Songdo Convensiaにて国際学術大会
 参加
 目的国 韓国
 期間 平成二八年一月二九日～二月二日
 劉建輝 副所長
 目的 Songdo Convensiaにて国際学術大会
 参加
 目的国 韓国
 期間 平成二八年一月二九日～二月二日
 佐野真由子 准教授
 目的 Songdo Convensiaにて国際学術大会
 参加
 目的国 韓国
 期間 平成二八年一月三〇日～二月一日

フレデリック・クレインス 准教授

目的 ハーグ国立文書館にて館長と面会及び学術交流協定書に調印、ライデン大学にて文学部長と面会及び学術交流協定に調印、オランダ日本学協会の学会にて平戸プロジェクトの紹介

目的国 オランダ

期間 平成二八年二月七日～一二日

大塚英志 教授

目的 ジャン・ムーラン・リヨン第3大学にて特別講演及び学会参加

目的国 フランス

期間 平成二八年二月一日～一八日

荒木浩 教授

目的 崇実大学校にて講演

目的国 韓国

期間 平成二八年二月二六日～一八日

坪井秀人 教授

目的 ベルリン自由大学にて意見交換、ベルリン州立図書館にて資料調査、ベルリン市内にて日本人関係建築を見学

目的国 ドイツ

期間 平成二八年二月二七日～平成二九年一月二日

大塚英志 教授

目的 中国外文出版發行事業局にて日本式まんが新人賞式典に出席

目的国 中国

期間 平成二九年一月一六日～一八日

郭南燕 准教授

目的 上海図書館及び徐家匯蔵書楼にて調査

目的国 中国

期間 平成二九年一月二三日～二月四日

坪井秀人 教授

目的 北京市内及び北京日本学研究センターにて調査及び打合せ

目的国 中国

期間 平成二九年二月六日～九日

榎本涉 准教授

目的 中国（江蘇省・山東省）にて調査及び踏査

目的国 中国

期間 平成二九年二月一〇日～一四日

パトリシア・フィスター 教授

目的 New York Hilton Midtown にて学会参加

目的国 アメリカ

期間 平成二九年二月一六日～二一日

佐野真由子 准教授

目的 チュラロンコン大学にて講演

目的国 タイ

期間 平成二九年二月一七日～二〇日

大塚英志 教授

目的 成均館大学校成均日本研究所にて講義及び教科書作成協議

目的国 韓国

期間 平成二九年二月二二日～二六日

磯前順一 教授

目的 シカゴ大学にて授業及び調査、ミシガン州立大学にて授業、講演及び調査、ニューヨーク市立大学及びデューク大学にて面談及び調査

目的国 アメリカ

期間 平成二九年二月二六日～三月六日

郭南燕 准教授

目的 輔仁大学、国家図書館及び中央研究

院にて調査

目的国 台湾

期間 平成二九年三月二日～七日

荒木浩 教授

目的 コロンビア大学にてシンポジウム参

加及び発表

目的国 アメリカ

期間 平成二九年三月八日～一三日

佐野真由子 准教授

目的 オックスフォード大学図書館及びケ

ンブリッジ大学図書館にて調査

目的国 イギリス

期間 平成二九年三月九日～二四日

石上阿希 特任助教

目的 ホノルル美術館にて調査

目的国 アメリカ

期間 平成二九年三月一二日～一九日

山田奨治 教授

目的 トロント大学にてワークショップ及

び Sheraton Center TorontoHotelにて総会出

席

目的国 カナダ

期間 平成二九年三月一三日～二〇日

坪井秀人 教授

目的 Sheraton Center TorontoHotelにて総

会出席及びレセプション開催

目的国 カナダ

期間 平成二九年三月一五日～二〇日

ジョン・ブリン 教授

目的 Sheraton Center TorontoHotelにて総

会出席及びレセプション開催

目的国 カナダ

期間 平成二九年三月一五日～二〇日

吳座勇一 助教

目的 Sheraton Center TorontoHotelにて総

会出席

目的国 カナダ

期間 平成二九年三月一五日～二一日

大塚英志 教授

目的 中国伝媒大学及び北京第二外国語大

学にてワークショップ及び講義、授業、ヒ

アリング

目的国 中国

期間 平成二九年三月一六日～二二日

郭南燕 准教授

目的 上海図書館にて調査

目的国 中国

期間 平成二九年三月二二日～二六日

所員活動一覧（二〇一六年一月一日～二〇一七年三月三十一日）

荒木 浩

●著書

『夢と表象 眠りとこころの比較文化史』（編集）勉誠出版 二〇一七年一月 五九二頁

『天野山金剛寺善本叢刊 第一期 第二卷 因縁・教化』（後藤昭雄監修、近本謙介と共編）勉誠出版 二〇一七年一月 全二巻 一三六〇頁

●論文

「対白框看夢的形象」『日語学習与研究』（中国語、史瑞雪訳）二〇一六・五、一八六号 二〇一六年一〇月 一～六頁

「夢と自照―古代仏教の言説と対外観をめぐって」『夢と表象 眠りとこころの比較文化史』勉誠出版 二〇一七年一月 四五五～四七八頁

「女の目、男の目―稲荷の女をめぐる赤染衛門と大江匡衡」『朱』第六〇号記念特集 伏見稲荷大社 二〇一七年三月一日 一六三～一七八頁

●その他の執筆活動

「翻訳 ギュスターヴ・ヘルトによる書評 トークイル・ダシー著『万葉集と古代日本の想像の帝国』（Torquill Duthe, *Manyōshū and the Imperial**Imagination in Early Japan*. Leiden: Brill, 2014.）『日本研究』第五四集 二〇一七年一月 一二九～一三二頁

石上阿希

●著書

『暁斎春画』（定村来人と共著）青幻舎 二〇一七年二月 二二八頁

●その他の執筆活動

「解説 春画研究者・石上阿希さんに聞く 北斎の春画ワールド」『美術手帖』二〇一六年一二月号増刊

「東西職人ら現代に復刻 木版技術を継承へ」『毎日新聞』（大阪版・夕刊）二〇一七年一月一九日

石川 肇

●その他の執筆活動

「先人に見る日本型1R」NICHIBUNKEN NEWSLETTER No. 94 二〇一六年十二月 四〜五頁
「馬の文化手帖 Season2」(連載一二回)『週刊 Gallop』二〇一七年一月一五日号〜三月二六日号

磯田道史

●著書

『江戸の家計簿』(監修、文庫)宝島社 二〇一七年一月 一八九頁

『徳川がつくった先進国日本』文藝春秋 二〇一七年一月 一五六頁

Usung Heroes of Old Japan 『無私の日本人』英語翻訳版、ジュリエット・ウインターズ・カーペンター訳 出版文化産業振興財団 二〇一七年三月 二〇八頁

●その他の執筆活動

「古今をちこち」(連載六回)読売新聞(朝刊) 二〇一六年一〇月二日〜二〇一七年三月一五日

「世の中を良くする種」読売新聞(朝刊) 二〇一六年一〇月一四日

「対談 京の視座(中島啓勝と)」朝日新聞(朝刊) 二〇一六年一月一〇日

「対談 未来メディアカフェ(万城目学と)」朝日新聞(朝刊) 二〇一六年一月二一日

「書評 瀧井一博著『渡邊洪基』」毎日新聞(朝刊) 二〇一六年一月一三日

「対談 京都のこれから、新聞のこれから(内田孝と)」京都新聞(朝刊) 二〇一六年一月二二日

「講演録 地震・津波から生き延びる知恵」第20回海岸シンポジウム報告書 二〇一六年一月二八日 一四〜二四頁

「対談 特別対談日本の人口減少は「直系家族病」だ(エマニュエル・トッドと)」『文藝春秋』二〇一六年二月号

「書評 呉座勇一著『応仁の乱』、諸田玲子著『梅もどき』、中野信子著『サイコパス』」毎日新聞(朝刊) 二〇一六年二月二一日

「書評 沢山美果子著『江戸の乳と子ども―いのちをつなぐ』」毎日新聞（朝刊）二〇一七年一月一日

「書評 黒木喬著『江戸の火事』、高田郁著『銀二貫』、寺田寅彦著『天災と国防』」朝日新聞（朝刊）二〇一七年二月五日

磯前順一

●論文

「いかにして近世日本を研究するか——近代の「想像／創造」論を超えて」ピーター・ノスコ、ジェームス・E・ケテラー、小島康敬編『江戸のなかの日本、日本のなかの江戸 価値観・アイデンティティ・平等の視点から』柏書房 二〇一六年一月 三七六〜四〇三頁

「津田左右吉の国民史構想 多民族帝国における単一民族国家論の役割」『アリーナ2016』第一九号 中部大学 二〇一六年一月 二五八〜二九二頁

伊東貴之

●著書

『シリーズ・キーワードで読む中国古典4 治乱のヒストリア——華夷・正統・勢』（編集、渡邊義浩・林文孝と共著）法政大学出版局 二〇一七年三月一日 二五二頁

●論文

“Postwar Japanese Research on the History of Early Modern Chinese Thought,” *ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture (Japanese Research on Intellectual Trends in China and Korea from the Eleventh to Seventeenth Centuries)*, No. 112, The Toho Gakkai (The Institute of Eastern Culture), February 2017, pp. 1-30 (査読付き)

「勢について」伊東貴之編（渡邊義浩・林文孝と共著）『シリーズ・キーワードで読む中国古典4 治乱のヒストリア——華夷・正統・勢』法政大学出版局 二〇一七年三月一日 一四一〜二二二頁

「戦後日本の中国哲学・思想史研究における比較思想的な観点や視座について——問題提起を兼ねた概観——」『比較思想研究』〔特集3：今、比較

思想の方法論を問う・第3回」 第四三号 比較思想学会 二〇一七年三月 六九〜七四頁

●その他の執筆活動

「二〇一六年／中国文学・文化 年末回顧 閻連科（イェン・リエンコー）の多様な貌——大作の翻訳相次ぎ、研究書も充実」『図書新聞』三二八四号 二〇一六年一月二四日号

「総説」伊東貴之編（渡邊義浩・林文孝と共著）『シリーズ・キーワードで読む中国古典4 治乱のヒストリア——華夷・正統・勢』法政大学出版局 二〇一七年三月一日 一〜二八頁

稲賀繁美

●著書

『海賊史観からみた世界史の再構築——交易と情報流通の現在を問い直す』（編著）思文閣出版 二〇一七年二月二八日 八五二頁

●論文

「去勢・不能から瞬時性と輪廻転生、さらには可能世界の濃度測定へ——脱戦後日本美術に関する断片的な覚書（後）」『あいだ』二二九号（連載二一八） 二〇一六年一〇月二〇日 二三〜二九頁

「「うつしみ」と「いつくしみ」——文化継承と再編への軌跡 戦後七十年と自然の営み」『神園』第一六号 明治神宮国際神道文化研究所 二〇一六年一月三日三〜一八頁

「もの・こと・かお——霊性の憑依と転生をめぐる」『比較文明』第三二号 二〇一六年一月一日 四〜一一頁

「超越視覚文化的觸覚感知——重新定義博物館學中的「現代性」以調整數位化的全球尺度模型 Haptic Sensations Beyond Visual Culture: Redefining “Modernity” in Museology so as to Readjust the Digitized Global Scale Model」『現代美術 MODERN ART』北雙特刊 TAIPEI BIENNIAL 2016 第一八三号 中華民國一〇五年 臺北市立美術館 二〇一六年一月 六二〜七五頁

「ナムジュン・バイクと仏教思想——「没後10年 2020年笑っているのは誰？ ？+？=？」展より」『あいだ』二二二号（連載一一九） 二〇一七年一月二〇日 二〜一五頁

「和辻哲郎『風土』成立の時空と欧州航路―歴史的偶然と地理的必然との交差において」橋本順光、鈴木禎宏編『欧州航路の文化誌―寄港地を読み解く』青弓社 二〇一七年一月二七日 一八五〜二一七頁

「文化の翻訳性序説―造形藝術における」国際シンポジウム「日本における「美術」概念の再構築―記録集編集委員会編『「美術」概念の再構築（アップデート）―「分類の時代」の終わりに「Toward Updating the Concept of『Bijutsu (Art)』At the Ending of『Age of Classification』』ブリュッケ+星雲社 二〇一七年一月二七日 二九七〜三二二頁

「美術史は全球化しうるか?―極東の視点からする批判的注釈」『日本研究』第五四集 国際日本文化研究センター 二〇一七年一月三十一日 一〇五〜一二八頁

「序文」(一〜一七頁)、「研究計画および経緯」(三〜一三頁)、「海賊史観からみた世界交易史・試論」(三〇九〜三三三頁)、「「公的研究費」の不正使用に関するコンプライアンス研修会」を誉め讃える」(七七六〜七八六頁)、「あとがき―あらたなる海賊学の船出にむけて」(八〇九〜八一四頁)『海賊史観からみた世界史の再構築―交易と情報流通の現在を問い直す』思文閣出版 二〇一七年二月二八日

「特集・草間彌生 《彼女は 私の心の天の まぶしい銀河となる》」『ユリイカ』二〇一七年三月号 八〇〜八八頁

●その他の執筆活動

「推薦のことば 明晰な頭脳、破天荒な知的冒険」『平川祐弘著作集』勉誠出版社 二〇一六年一〇月

「現代のことば 希望の色は何色か」『京都新聞』(夕刊) 二〇一六年一月一日

「海賊史観から世界を見る」『グラフィケーション―特集―海賊・自由・ユートピア』(電子版) 第7号 二〇一六年二月号 二〜一一頁

「インターネット双方向的同窓会 Nichibunken Interactive Alumni Network 創設にむけての個人的提言」NICHIBUNKEN NEWSLETTER No. 94 二〇一六年十二月 一〜二頁

「書評 橋本真之著『造形的自己変革』」『図書新聞』三二八二号 一二月一〇日

「パクリエイター異聞―台北での国際デザイン史研究学会での体験から(1)」『図書新聞』三二八三号(連載一六八) 二〇一六年十二月一七日

「書評 今井祐子著『陶芸のジャポニスム』」『図書新聞』三二八五号 二〇一七年一月一日

「世界東京化計画」Tokyonizationの教訓―台北での国際デザイン史研究学会から(2)」『図書新聞』三二八六号(連載一六九) 二〇一七年

一月十四日

〔現代のことば 私腹の財から公共の財へ〕『京都新聞』（夕刊）二〇一七年一月二六日

〔等価交換の幻想から修復的司法の刷新へ——ヴァヌアツの事例紹介から〕『図書新聞』三二八七号（連載一七〇）二〇一七年一月二二日

〔現代アパレル業界考…文化資本幻想の再配置——台北の国際デザイン史学会から〕『図書新聞』三二八八号（連載一七一）二〇一七年一月二八日

〔コラム 夢と文学・夢という語彙——還暦の月日を跨いで（稲賀敬二・稲賀繁美） 荒木浩編『夢と表象 眠りとこころの比較文化史』

二〇一七年一月三〇日 一〇一〜一〇五頁

〔読んで心豊かに…はじめての『茶の本』〕『月刊 茶の間』二月号 二〇一七年二月一日 二九〜三七頁

〔理論としての台湾の可能性——『知識台湾 台湾理論的可能性』（麦田出版、2016）〕『図書新聞』三二八九号（連載一七二）二〇一七年

二月四日

〔世代間の遣り取りと隙間とに育まれる「光」——美術批評家ゾラの軌跡…『印象派の終焉』の著者・リチャード・シフの来日にちなんで〕『図

書新聞』三二九〇号（連載一七三）二〇一七年二月一日

〔現代のことば 高等教育・研究の危機的状况〕『京都新聞』（夕刊）二〇一七年三月一日

〔書評 松岡宏明著『子供の世界 子供の造形』〕『図書新聞』三二九四号 二〇一七年三月一日

井上章一

●著書

『討厭京都——古都背後、不可一世的優雅與驕傲』（中国語翻訳版、王華懋訳）三采文化股份有限公司 二〇一六年一月四日 二〇六頁

『京女の嘘』PHP研究所 二〇一七年一月二〇日 一九六頁

『阪神タイガースの正体』（文庫）朝日新聞出版 二〇一七年二月二八日 四〇九頁

●その他の執筆活動

- 『洛外』に隠れた名所あり』『サライ』二〇一六年一〇月号
- 『書評 鹿島茂著『ドーダの人、小林秀雄』』『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年一〇月六日
- 『書評 森下章司著『古墳の古代史』』『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年一〇月二七日
- 『美しい女子大生は、どこにいる』『PHP増刊』二〇一六年一二月号
- 『座談会 みんなやっばり京都が好き（船越英一郎、綿矢りさと）』『文藝春秋』二〇一六年一二月号
- 『丹下健三の大東亜——富士山とローマをむすぶ糸』朴美貞・長谷川怜編『日本帝国の表象——生成・記憶・継承』えにし書房 二〇一六年一一月五日
- 『下町のおばちゃんが育てた』『日経アーキテクチュア』二〇一六年一二月一〇日号
- 『書評 アンナー・ビルスマ著『パッハ・古楽・チェロ』』『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年一〇月二四日
- 『書評 ヴァレリー・アフアナシエフ著『ピアニストは語る』』『週刊ポスト』二〇一六年一二月二日号
- 『対談 現代化が奪うエロス（花房観音と）』『京都新聞』（朝刊）二〇一六年一二月八日
- 『書評 林丈二著『文明開化がやって来た』』『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年一二月一五日
- 『対談 『景観美』と言えるのか（中島啓勝と）』『朝日新聞』（京都版・朝刊）二〇一六年一二月一七日
- 『項目執筆 中華思想、桂離宮、京美人、数寄屋』『対談（酒井順子と）』『別冊太陽（京都を知る100章）』二〇一六年一二月一八日
- 『回顧 二〇一六 私之三冊』『日本経済新聞』（朝刊）二〇一六年一二月二五日
- 『建築で虚勢をはる独裁者のいとなみ』『SAPIO』二〇一七年一月号
- 『除了巴掌大的“洛中”、都是乡下』『京都漫歩』北京联合出版公司 二〇一七年一月
- 『秋田、新潟、そして京都——それぞれの美人論』『PHP増刊』二〇一七年一月号
- 『文化庁がやってくる（池坊専好と）』『産経新聞』（朝刊）二〇一七年一月一日
- 『イタリアでは街並みの持続性こそが優先される』『週刊ポスト』二〇一七年一月六日

- 「書評 桃崎有一郎著『平安京はいらなかった』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一七年一月二二日
- 「永山の下に眠っている歴史の可能性を思わせる」『遼』二〇一七年一月二〇日
- 「座談会 地域再生道筋探る(和泉康夫、永田紅、深尾昌峰、松永桂子と)」『読売新聞』二〇一七年一月二九日
- 「大阪が壊れ、消える!」『SAPIO』二〇一七年二月号
- 「『源氏姉妹』に、おののいて」『波』二〇一七年二月号
- 「常盤——ミス平安は、この人だとどめをさす」『PHP増刊』二〇一七年二月号
- 「『人文研』の生き証人」(再録)『知性・一九五七——二〇一七』二〇一七年二月
- 「書評 尾本恵市著『DNAでふりかえる人類史』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一七年二月二日
- 「書評 松隈洋著『建築の前夜』『週刊ポスト』二〇一七年二月三日号
- 「書評 山本有造著『カロライン・フット号が来た!』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一七年二月二三日
- 「十年間の新書ベスト三」『目利き』二人が選ぶ二〇一六年私のオススメ新書『中央公論』二〇一七年三月号
- 「大阪と関西を考える」『WEEKLY REPORT (大阪北ロータリークラブ)』二〇一七年三月一五日
- 「書評 山本雄二著『ブルマーの謎』『日本経済新聞』(夕刊) 二〇一七年三月一六日
- 「日本の姿——戦争と街並から見えること」『交詢雑誌』二〇一七年三月二〇日
- 「大阪まみれ」(連載二二回)『産経新聞』(夕刊) 二〇一六年一〇月三日〜二〇一七年三月二七日
- “Possibilities of Modern Architecture” 瀧井一博編『失われた20年と日本研究のこれから/失われた20年と日本社会の変容——海外シンポジウム 2015 日文研・ハーヴァード』国際日本文化研究センター 二〇一七年三月三一日

牛村 圭

● 論文

「宴のあとに——オリンピックを問う」『琅』三二号 二〇一六年一〇月 二〇二頁

●その他の執筆活動

〔竹山道雄を読む〕竹山道雄にめぐり会えて―平川祐弘編『竹山道雄セレクション I 昭和の精神史』藤原書店 二〇一六年一月 五五四～五六六頁

〔書評 熊野留理子著『日本教育占領』』『比較文明』三二号 二〇一六年一月 二四〇～二四三頁

●櫻本 渉

●論文

〔平安末期天台宗における宋代仏教へのまなざし―柴西入宋の前提として―』『佛教史學研究』五九卷一号 二〇一六年一月 一九～四一頁

〔宋日・元日間海上航路と高麗島嶼地域（宋日・元日間海上航路における高麗の島嶼）』『해양문화재』九号 二〇一六年一月 七二～一二二頁

〔悪石島の寄船大明神とその周辺〕稲賀繁美編『海賊史観からみた世界史の再構築―交易と情報流通の現在を問う直す』思文閣出版 二〇一七年二月二十八日 三九五～四一五頁

●大塚英志

●著書

『感情化する社会』太田出版 二〇一六年一〇月 二九五頁

『캐릭터 소설쓰는법』『キャラクター小説の作り方』(電子書籍版、韓国語、김성민訳) 북바이북 (한국출판마케팅연구소) 二〇一六年一月

『이야기 체조』『物語の体操』(電子書籍版、韓国語、김성민訳) 북바이북 (한국출판마케팅연구소) 二〇一六年一月

『캐릭터 메이커』『キャラクターメーカー』(電子書籍版、韓国語、신정우訳) 북바이북 (한국출판마케팅연구소) 二〇一六年一月

『이야기의 명제』『物語の命題』(電子書籍版、韓国語、신정우訳) 북바이북 (한국출판마케팅연구소) 二〇一六年一月

『세계만화학원』『世界まんが塾』(電子書籍版、韓国語、신정우訳) 북바이북 (한국출판마케팅연구소) 二〇一六年一月

『世界まんが塾』株式会社 KADOKAWA 二〇一七年三月 三〇一頁

『殺生と戦争の民俗学』柳田國男と千葉徳爾』株式会社 KADOKAWA 二〇一七年三月 三九〇頁

●論文

「범죄소년문헌론」『犯罪少年文学論』(韓国語, 최재혁訳) 『季刊「文化/科学」』八八号 二〇一六年二月 二六六〜二九〇頁

「『シン・ゴジラ』は感情天皇制を断念する」『ユリイカ』二〇一六年二月 二二六〜二二六頁

『妖怪学批判 2』『怪』Vol. 0029 二〇一六年一月 二七六〜二八九頁、「3」Vol. 0050 二〇一七年三月 二四二〜二五五頁

●その他の執筆活動

「インタビュー」『感情化する社会』の先にあるもの』『金曜日』二〇一六年一月 四〇〜四二頁

「書評」『文學界10月号』『週刊ポスト』二〇一六年一月二五〇日号

「インタビュー」『오타쿠 담론의 아버지, 한국에 오다』만화원작자이자 일본 대중문화비평가인 오쓰카 에이지와의 대담 「韓国を訪ねた「おたく

の言説」の父—まんが原作者・日本大衆文化批評家大塚英志との対話』『CINE 21』No. 1082 二〇一六年一月三〇日 八二〜八七頁

「濃度の薄い世界」『早稲田文学』早稲田文学会 二〇一六年二月 五四〜五五頁

「書評」柄谷行人著『憲法の無意識』『週刊ポスト』二〇一七年一月六日号

「書評」新谷卓著『終戦と近衛上奏文 アジア・太平洋戦争と共産主義陰謀説』『週刊ポスト』二〇一七年二月一〇日号

「web教材」ものがたり創作」N予備校 二〇一七年二月二一日配信開始

「書評」柄谷行人著『柄谷行人講演集 1995-2015 思想的地震』『週刊ポスト』二〇一七年三月二四日号

「八雲百怪」(森美夏と共著)『ヤングエース』二〇一六年一〇月号〜二〇一七年三月号

「恋する民俗学者」(中島千晴と共著)『ComicWalker』二〇一六年一〇月〜二〇一七年三月

「アライズキ、今宵も小豆を洗う。」(山崎峰水と共著)『ヤングエース』二〇一六年十一月号〜二〇一七年三月号

「まんがでわかるまんがの歴史」(ひらりと共著)『ヤングエース』二〇一六年十一月号〜二〇一七年三月号

郭 南燕

● 著書

『都靈聖殮布』（共訳）良友之聲出版社 二〇一七年二月 一〇四頁

● その他の執筆活動

「南十字星の下の海外シンポジウム」『日文研』五八号 二〇一七年三月 三七〜四三頁

「默會知識、得心應手——設計的東方思維與表徵鄭巨欣」許江、鄭巨欣共編『匠心文脈』中国美術学院出版社 二〇一六年一月 二五九頁

北浦寛之

● 論文

“The Lost Studio System: Reconsidering Japanese Film Production after the Bubble’s Collapse.” 瀧井一博編『失われた20年と日本研究のこれから／失われた20年と日本社会の変容——海外シンポジウム2015 日文研・ハーヴァード』国際日本文化研究センター 二〇一七年三月三十一日 二五二〜二五五頁

楠 綾子

● 論文

“The Early Years of the Ground Self-Defense Force, 1945–1960.” Robert D. Eldridge and Paul Midford eds., *The Japanese Ground Self-Defense Force*, New York: Palgrave Macmillan, 2017, pp. 59–131.

“The Debate on Japan’s Foreign and Security Policy During ‘The Lost Two Decades,’” 瀧井一博編『失われた20年と日本研究のこれから／失われた20年と日本社会の変容——海外シンポジウム2015 日文研・ハーヴァード』国際日本文化研究センター 二〇一七年三月三十一日 一九三〜二〇二頁

●その他の執筆活動

「書評 武田悠著『経済大国』日本の対米協調——安保・経済・原子力をめぐる試行錯誤、1975～1981年」『国際政治』第一八八号
二〇一七年三月 一四二～一四五頁

「項目執筆 「平和安全法制整備法」「国際平和支援法」「防衛装備庁」「安全保障技術研究推進制度」「ジブチ自衛隊拠点」「特殊作戦群」「米軍属」「同盟調整メカニズム」「北部訓練場の過半の返還」「日韓秘密軍事情報保護協定」「イミダス」「防衛」二〇一七年版

倉本一宏

●著書

『現代語訳小右記3 長徳の変』吉川弘文館 二〇一六年一〇月 二八八頁

『日記で読む日本史6 紫式部日記を読み解く』（監修、池田節子著）臨川書店 二〇一七年一月 二七〇頁

『日記で読む日本史12 物語がつくった驕れる平家』（監修、曾我良成著）臨川書店 二〇一七年一月 二〇七頁

『藤原伊周・隆家』ミネルヴァ書房 二〇一七年二月 二九八頁

●論文

『「御堂関白記」の『妻』と『妾』について』『説林』65 愛知県立大学国文学会 二〇一七年三月五日 五五～六二頁

●その他の執筆活動

『御堂関白記』『日本歴史』第八二四号 二〇一七年一月 五六～六二頁

『自著を語る』『藤原伊周・隆家』『究』二〇一七年一月号 一～二頁

フレデリック・クレインズ

●論文

「略奪品か戦利品か——一六一五年のサント・アントニオ号拿捕事件と幕府の対応」稲賀繁美編『海賊史観からみた世界史の再構築——交易と情

報流通の現在を問ひ直す』思文閣出版 二〇一七年二月二八日 三六五〜三九四頁

●その他の執筆活動

「オランダ人が見た大坂の陣」『NHU Magazine』三号 二〇一六年一〇月

「大坂方は士気高く―平戸オランダ商館文書が語る大坂の陣」『歴史街道』三四四号 二〇一六年二月 四六〜四七頁

「口絵解説 G・F・メイラン『日本』1830年刊所収」『日本研究』第五四集 二〇一七年一月

「平戸オランダ商館文書の調査研究―激動の江戸初期における対外関係を解き明かす」『きざし』一号 二〇一七年三月 一三頁

「口絵解説 江戸城図（モンターヌス『東インド会社遣日使節紀行』1689年版所収）」『日文研』五八号 二〇一七年三月

呉座勇一

●著書

『応仁の乱』中央公論新社 二〇一六年一〇月 三二八頁

●論文

『鎌倉大草紙』と小山義政の乱』義堂の会編『空華日用工夫略集の周辺』義堂の会 二〇一七年三月 三三〜五五頁

●その他の執筆活動

「交流の歴史学」（連載六回）朝日新聞（朝刊） 二〇一六年一〇月二二日〜二〇一七年三月二五日

「解説 後期網野史学の代表作」網野善彦著『日本中世に何が起きたか』株式会社KADOKAWA 二〇一七年三月

「対談 応仁の乱×第一次世界大戦 英雄なき時代の混沌に立ち向かう」（細谷雄一と）『中央公論』四月号 二〇一七年三月

小松和彦

●著書

An Introduction to Yokai Culture: Monsters, Ghosts, and Outsiders in Japanese History（『妖怪文化入門』英語翻訳版、依田寛子、マット・アルト訳）

出版文化産業振興財団 二〇一七年三月 一九六頁

●その他の執筆活動

「言葉の遠近法」(連載三回)『公明新聞』二〇一六年一〇月五日～二月七日

「解説 内藤さんの現場主義・フィールドワーク型の研究への敬意」内藤正敏・松岡正剛共著『古代金属国家論』二〇一六年一月 一五〇～一五九頁

「人の心を映し出す「器」」『朝日新聞』(夕刊) 二〇一六年二月二一日

「異類婚姻譚をめぐる」『怪』vol. 0049 二〇一六年二月 三三～三七頁

「文化功労者に選ばれて」『公明新聞』二〇一六年二月二八日

「解説 水木しげるはいつから妖怪漫画家になったか」『水木しげる漫画大全集』第五六卷(河童の三平・上) 二〇一七年一月 五二〇～五二三頁

「講演録 自然災害と怪異伝承―民俗知の活用を考える―(柳田國男記念伊那民俗学研究所総会記念講演会)」『伊那民俗研究』第二四号 二〇一七年二月 二～二二頁

「コメント 怪異・妖怪の東西 比較妖怪学に向けて」天理大学考古学・民俗学研究室編『モノと凶像から探る怪異・妖怪の東西』二〇一七年三月 一四六～一五五頁

「講演録 グローバル時代の日本学―その現在と未来を考える―」東京外国語大学大学院日本学研究院編『国際シンポジウム…「国際日本研究」対話、交流、ダイナミクス』= Internationalizing Japan studies: dialogues, interactions, dynamics』(二〇一五年度) 二〇一七年三月 一～一五頁

「忍者の纏う虚像を剥がす」『怪』vol. 0050 二〇一七年三月 三二～三七頁

佐野真由子

●著書

『新領域・次世代の日本研究 New Vistas: Japanese Studies for the Next Generation』(細川周平・山田奨治・佐野真由子共編) 国際日本文化研究セ

ンター 二〇一六年十一月 一七四頁

●その他の執筆活動

「国際交流史と万国博覧会」『Peace and Culture 青山学院大学社会連携機構国際交流共同研究センター』第九巻第一号 二〇一七年三月 一九～三七頁

「公用語について」『日文研』五八号 二〇一七年三月 三〇～三六頁

瀧井一博

●著書

『失われた20年と日本研究のこれから／失われた20年と日本社会の変容』『海外シンポジウム2015 日文研・ハーヴァード』（編著）国際日本文化研究センター 二〇一七年三月三十一日 二七六頁

●論文

「Japanese Society as a Place for Knowledge Creation and Cooperation」：瀧井一博編『失われた20年と日本研究のこれから／失われた20年と日本社会の変容』『海外シンポジウム2015 日文研・ハーヴァード』国際日本文化研究センター 二〇一七年三月三十一日 一三五～一四一頁

●その他の執筆活動

「インタビュー 耕論 国家の象徴とは」『朝日新聞』（朝刊）二〇一六年一〇月一四日

「政治学の古典を読む（一七） 国家建設の実践の書（ダントレーヴ（石上良平訳）『国家とは何か―政治理論序説』新装版）みすず書房 二〇〇二年）『究』第六八号 二〇一六年十一月号 四四～四五頁

「インタビュー 東大初代総長 知の懸け橋」『読売新聞』（夕刊）二〇一六年十一月二四日

「政治学の古典を読む（一八） 情報と人情（松本剛吉（岡義武・林茂校訂）『大正デモクラシー期の政治…松本剛吉政治日誌』岩波書店 一九五九年）『究』第七一号 二〇一七年二月号 四四～四五頁

坪井秀人

● 著書

五味湖典嗣・日高佳紀編『谷崎潤一郎読本』（千葉俊二他と共著）翰林書房 二〇一六年一月 三五五頁

宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編『「サークルの時代」を読む——戦後文化運動研究への招待』（共著）影書

房 二〇一六年一月 三六六頁

● 論文

「二十世紀日本語詩を思い出す」『現代詩手帖』思潮社（連載） 第五九卷一〇号（連載一八） 二〇一六年一〇月 一三〇～一三九頁、第五九卷
一一号（連載一九） 二〇一六年十一月 一六〇～一六八頁、第六〇卷一号（連載二〇） 二〇一七年一月 一〇四～一二頁、第六〇卷二号
（連載二一） 二〇一七年二月 一三八～一四七頁、第六〇卷三号（連載二二） 二〇一七年三月 一三六～一四六頁

ジョン・ブリン

● 著書

A Social History of the Ise Shrines: Divine Capital (co-authored with Mark Teeuwen), Bloomsbury, February 2017, 302 pages.

● 論文

“Amaterasu’s progress: the Ise shrines and the public sphere of postwar Japan,” Hugh Cortazzi ed., *Carmen Blacker: scholar of Japanese religion, myth and folklore: writings and reflections*, Renaissance Books, January 2017, pp. 396–412.

● その他の執筆活動

「書評 神崎宣武・白幡洋三郎・井上章一編『日本文化事典』『學鑑』第一一三卷第三号 二〇一六年九月 五八～五九頁

古川綾子

●その他の執筆活動

- 「現代のことば」(連載三回)『京都新聞』(夕刊) 二〇一六年一〇月七日〜二〇一七年二月八日
 「上方落語の舞台 十選」(連載八回)『日本経済新聞』(全国版・朝刊) 二〇一七年三月二〇日〜三月三十一日

細川周平

●その他の執筆活動

- 「間嶋さん」『ブラジル俳文学』二〇一六年一〇月号(三八九号) 一九頁
 「書評 クリスティン・グレイネル著『日本の身体を読みとその認知的ディアスボラ』(Christine Greiner, *Leituras do Corpo no Japão e Suas Dispersões Cognitivas*. São Paulo n.1 edições, 2015)」『日本研究』第五四集 二〇一七年一月 一三三〜一三六頁

松田利彦

●著書

関周一編『日朝関係史』(共著) 吉川弘文館 二〇一七年二月 四一六頁

●論文

- 「日帝強占期、日本朝鮮関係記録―朝鮮植民地支配에 있어 政策担当者的의 個人記録을 中心으로」韓日文化交流基金編『韓日兩國、서로를 어떻게 기록했는가?』景仁文化社 二〇一七年二月 三三三〜三九〇頁
 「一九二七年、植民地朝鮮における華僑排斥事件」『韓国朝鮮文化研究』(東京大学韓国朝鮮文化研究室研究紀要) 第一六号 二〇一七年三月 一〜三四頁

山田 斐治

● 論文

“Changes in Japanese Copyright Law Post-1990s: US/Corporate Interest vs. User Demand.” 瀧井一博編『失われた20年と日本研究のこれから』失われた20年と日本社会の変容——海外シンポジウム2015 日文研・ハーヴァード』国際日本文化研究センター 二〇一七年三月三十一日 二三九〜二五〇頁

● その他の執筆活動

「コメント 美の殿堂 企業名賛否 命名権問題 戸惑いと期待」『京都新聞』（朝刊）二〇一六年一〇月七日

「監修 アメリカ西海岸の新しいZENをめぐる旅」『SFルネサンス』の息吹 アート・ZEN・テックの新しい関係性」『インタビュール SPECIAL INTERVIEW 村上隆に聞く、芸術作品に自由を宿す、修行としてのZENアート』『美術手帖』二〇一六年一二月号

「JASRACはなぜ嫌われるのか？ 音楽ユーザーの自由狭まり「悪者」に」『withnews』二〇一七年一月一〇日

マルクス・リュッターマン

● 著書

（共編）『*Japonica Humboldtiana* vol. 18 (2016), Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, February 2017, 259 pages.

● 論文

「『一筆啓上』の礼儀作法―行動学に込める記号学を検討して―」山口大学人文学部『異文化研究』第一二号 二〇一七年三月 八八〜一〇〇頁

劉 建輝

● 論文

「19世紀初稿的中国開埠地——東亞『近代』從這里開始」寧稼雨他編『孫昌武教授八十華誕紀念文集』百花文藝出版社 二〇一六年一月 一五七〜一八〇頁

「現代中国文学の日本因縁」 黄自進・潘光哲編 『近代中日関係史新論』（近代中日関係学叢書） 稻郷出版社 二〇一七年三月 五一五～五四五頁
 ●その他の執筆活動

「コラム 広州十三行」 稲賀繁美編 『海賊史観からみた世界史の再構築——交易と情報流通の現在を問い直す』 思文閣出版 二〇一七年二月
 二八日 四四三～四五〇頁

日文研 六十号

二〇一八（平成三〇）年三月三十一日発行

編集 榎本 涉、石川 肇

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五―二二二二

ファックス (〇七五) 三三五―二〇九一

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社



NICHIBUNKEN

ISSN 0915-0889

日 文 研 六 十

二〇一八年三月

国際日本文化研究センター